慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	毛利貞齋編「増續大廣益會玉篇大全」
Sub Title	
Author	関場, 武(Sekiba, Takeshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1977
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.36, (1977. 3) ,p.112- 170
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	森武之助教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00360001-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

毛利貞齋編「増續大廣益會玉篇大全」

関　場　武

本稿は、毛利貞斎の著作のうち、後世最も流布した単字字書「増續大廣益會玉篇大全」を取り上げ、その諸本についての調査報告を中心に記したものである。はじめに著者毛利貞斎に関する論考と、本書についての簡単な紹介を加えてある。筆者にとって貞斎およびその相当な量にのぼる全著作に関しては、未だ調査の途上にあるゆえ、不明な点も少なくない。したがって、その報告は他日を期したいと考えているが、「増續大廣益會玉篇大全」の諸版については、今日までにその大半を見ることを得たと信ずるので、こゝに一応報告することとした。本稿は、昭和四十九年度の休暇中の研究成果の一部に基づくものである。その砌、研究資金や授業の振り替えその他につき色々と御配慮をいただいた皆様、図書調査に際し、御懇切なる御世話をたまわった公私の文庫・図書館およびそのかたがたに、一々芳名は記さないが、深甚の謝意を捧げる次第である。

一、毛利貞斎について

毛利貞齋

名ハ瑚珀、字虚白、貞齋ハ号ナリ、浪花ノ人、京師ニ舌講ス、諸書俚諺抄ヲ著シテ梓行スルニ、皆自ラ筆ス、其敦厚ナルヲ見ツヘシ、著述甚タ冨ミテ、業、宇遯庵ト雁行ス

右は南山道人池永秦良編するところの「諸家人物誌」（寛政四年〈一七九二〉七月刊）上巻に見える、毛利貞斎に関する記述である。同書ではこの後に「著述」として、「四書俚諺鈔」・「同集註俚諺鈔」以下「句双紙首書」・「首書會玉篇」に至る、計三十二点の著作名を列挙している。以後刊行された如何なる人名辞典・各種事典のたぐいを見ても、貞斎に関しては、右の記述をほゞ踏襲しているのが普通である。曰く、浪華の人で、京に出て舌耕をし、漢籍の俗解書を多く著わし、ほゞ同時代に活躍した遯庵宇都宮由的（宝永六年〈一七〇九〉歿　七十七歳）と並び称される。……こういった紹介がなされるのが普通である。梅薗堂都の錦は、その「元禄大平記」（元禄十五年〈一七〇二〉三月刊）巻七ノ四「今の学者を指折てみる」の中で、毛利貞斎を、「徳行にかまはず、たゞ博文を好、書数に済る事をもつはらにして、ほまれをもとめ」「あまねく世上に名をよばるゝ」「外題学者」の一人に数えあげている。本当に貞斎は、たゞそれだけの人にしか過ぎなかったのであろうか。

そもそも筆者が貞斎に関心を持ったのは、後述する「増續大廣益會玉篇大全」の著者としての興味がはじめであった。そして次に、たまたまその「初學指南抄」を繙いた折、巻之二の「古文後集」に関する注解記事の中に

真實　……先年出セル評林ニ記セル。六學僧傳幷ニ▲遺經閣詩▲佛祖統紀▲宗鏡録序等、逐一可ニ刪去一

養親　養準也、此説大ニ誤レリ。先輩如レ此辯ゼルガ故ニ、愚ガ評林ニモ記セリ、當ニ刪去一、凡字書韻書ニ準也ノ註未ニ一覧一（種

等という個所が屢々出て来るのを知って、その興味は不動のものとなったのである。自著中の誤りを堂々と訂正している。――この簡単なようでなかなか出来ないことを一見潔くやっている、その態度に心を惹かれたのである。

「初學指南抄」三巻は、貞斎の晩年、享保五年（一七二〇）正月に刊行された(註1)。それは、天明頃発売の「増補歌枕秋の寝覚」後印本に付された定栄堂吉文字屋市兵衛の広告「儒書品目」中に

朱引指南、唐ノ歴代要覧、廿一史大略經扙詩文讀法指南ヲ委ク載、經文出所ヲ記、都テ初学ノ為ニ成ヲ集ム早学文ノ扙也

と紹介されているが如き内容を有する。そして後に、本書の巻二までと菊池桐江子の「文章偶語」、それに「職原記事」・「李巨山詠物詩」を付載して、「補正初學指南抄」と題しても発売されているものである。ところで、「初學指南抄」の目録中に「古文後集評林 竝ニ俚諺鈔ノ誤付出處」とあるように、同書巻二には、貞斎が嘗て著わした「古文真實後集合解評林」十巻（延宝七年〈一六七九〉刊）と「古文真實後集俚諺鈔」二十巻（宝永四年〈一七〇七〉刊　男瑚珣校閲）の、二書の補訂が記されている。而して実際にその本文をながめてみると、前に引用した一節からも覗えるように、とくに、先に刊行された「合解評林」について、その誤りを訂正するところが多く、

以上引書之全文者、愚先年筆記シ世間流行セル俚諺鈔二十冊ヲ繙テ可ニ一覧一、且俚諺鈔ニモ誤レルヲハ改正セリ、初學萬一ノ助タラバ幸甚

という一文を以て終っている。――このような態度に、市井の学者としての良心を見出したような気がしたのである。尤も、読み進んで行くと

林以正　傳古来無ニ考出人一、況於レ愚乎、先年出セル評林ニ或人ノ曰詳ニ于神仙通鑑一ト彫刻セリ。當ニ刪去一、重ネテ神仙通鑑ヲ考ルニ無レ之、好事ノ癖者某ヲ欺ケルカ故ナリ。

月出篇　評林先年刺ニ陳霊公淫一ニ夏姫ニ作也ト、如レ此先輩講ジ来レル故ニ記セリ。今逐一詩經ノ末書ヲ閲スルニ、陳君誰ヲ

指スト云フヲ不レ記、當ニ刪去ニ（赤壁賦）

等という個所や、巻一の

予ガ享保第三年ニ刊行ヲ許セル。歴代参考ト号スル五巻ヲ繙テ可レ見。若ハ初學ノ一助トナランカ（歴代略次）

予ガ正徴第六ニ改正セル孝經大義詳略大全ト号スル四巻ニ引用スルヲ。初學繙イテ。一覧シテ可レ知（孝經）

凡四書ニ附テノ読癖ノ出處考ヘ異論等ハ。予ガ撰出スル。四書集註俚諺鈔ト題スル五十冊ヲ考ヘテ知ルベシ。（大學）

予ガ先年ガ掛物ニシテ。刊行サセタル昭穆遷廟ノ圖ト号スルヲ可レ見（中庸）

という個所も目につく。それゆえ受け取り様によっては、弁解がましいとか、いや、そうではなくて、初学の徒に対しむやみに先輩や他人の説を鵜呑みにすることを戒めているのであるとか、あるいはまた舌耕の徒であるだけに流石商売上手である等と、色々推測することもでき、それほど高潔な士であったとも思えなくなってくるのであるが……。

ところで、前にも述べたように、ふつう、毛利貞斎は、名を瑚珀、字虚白、号貞斎、通称香之丞であると説明され、大よそ三、四十部の著作が彼のものとされている。しかしながら、貞斎に関しては、その生没年時を含めて未だ詳かならぬ点が多い。著作の数もそうである。例えば、中には、香之丞を香之進としたり、あるいは息子の瑚珣（一唯軒）と混同して、その「蒙求標題俚諺鈔」（宝永三年〈一七〇六〉刊）を父貞斎のものとして数えあげたり、逆に貞斎の著作を瑚珣のものとしたりしている場合がある（註1参照）。本稿の性質上、簡単に述べることゝするが、手始めに彼の著作を辿ってみると、大体延宝三年から享保の半ば過ぎ頃まで、京都を中心に活動を続けたことが知られる。そして、「貞斎」と号する前に、「玄斎」とも号していたことが判明する。而してその証拠となるのは、次にあげる「孝經大義詳略大全」である。

「孝經大義詳略大全」大本四巻には、正徴六年（一七一六）四月刊の重改本もあるが、その初版は延宝七年（一六七九）五月のことである。而してその延宝七年版に松岡版と銭屋版の二種がある。すなわち一は「延寶七己未歳仲夏吉日」の年記の後に「書肆　松岡平兵

衛繡梓」とあるものであり、一は同所に「書肆　錢屋儀兵衛繡梓」とあるものである。この両者の刊記部分を比較してみるに、後者の「錢屋儀」の三文字は入木なることが明白であり、全体の刷りも松岡版の方が良く、松岡版が初版であることを知る。さて、こゝで問題になるのは、その内題である。すなわち、初版と目される松岡版の内題は

孝經大義詳略大全巻之一（巻之三）
洛汭　逋客　毛利　玄齋　校輯」

孝經大義詳略大全巻之二（巻之四）
洛下　逋客　毛利　玄齋　校輯」

となっている。まさに天和三年（一六八三）孟春刊のイロハ分け「新増書籍目録」の「こ　儒書」の部に「四　孝經祥畧大全首書毛利玄齋」とあるそれである。ところが、後印の錢屋版では、当該個所の「洛汭」の「汭」、「玄齋」の「玄」に、各々「下」、「貞」を入木し、全巻その署名部分を「洛下　逋客　毛利　貞齋　校輯」の如くに改めてあるのである。軽々に玄齋と貞齋を同一人物と見做すことは危険であるかもしれないが、この場合、玄齋改め貞齋という関係、玄齋から貞齋への改名ということを示している、と見るのが自然であろう。同じ延宝七年五月に刊行された「古文真實後集合解評林」にも、刊記の「延實第七己未稔仲夏吉辰」の年記と書肆名との間にある著作者名の部分が、「洛下　逋客」の四文字を残して削られている後印本が存し、改名のあったことをうかゞわせているのである。天和三年の「鼇頭助語辭」や貞享二年（一六八五）の「韻鏡秘訣袖中抄」には「貞齋」の署名が無く、また書籍目録類でも、貞享二年刊の「廣益書籍目録大全」以下、みな「孝經大義詳略大全」の作者付を「虚白」又は「毛利虚白」としており、「玄齋」から「貞齋」への改名の時期は定め難いが、元禄元年（一六八八）十一月刊の「陳平六奇考諺解」が、扉に「毛利貞齋諺解」となっているので、その時までの改名であることは間違いない。あえて想像を逞しうすれば、易の「元亨利貞」から来ているとも、「韻鏡」名乗字研究の影響による改名かとも考えられる。とすると、あるいは貞享頃のことであろうか。

さて、こゝにもう一つ、「翰墨節用」と題する一本がある。「節用」の名を称するものゝ、本書は、当時すでに相当の流行を見せて

いたイロハ分けの二躰節用集、二行節用集とはちがって、詩文を草する時に用いる事物等の漢語の異名・異称や類語・慣用句、名数その他を、間々解説をまじえながら、ほゞ天文・時節・地儀・人倫人事その他（本文中には「人物」「交際」とあり）の順に大別して、集めてあるものである(註2)。本文部分九十丁半、片面見出し語五行双註十行から成る本書は、その前見返し子持ち枠内に、大きく「翰墨節用」と書名を出し、その右下に「虚白堂校閲」、左下に「嘯月軒繡梓」とする。そして続く巻頭一丁半には、次のような序文が記されている。

今之學者擯レ文談レ藪作レ賦裁レ詩　曷嘗貧ニ事類故實一而獲レ盡ニ其美一乎　粤稽ニ往牒一　若ニ玉海・説郛・初學記・藝文類聚・杜氏通典・白孔六帖・合璧事類諸編一　旁搜博采　雖ニ事已備ニ於類之中一　而連篇紊牘不レ勝ニ浩瀚一也　予居恒念ゑ欲レ輯ニ類書事物中之有ニ別名一者上萃爲ニ一帙一以便ニ童蒙一　遂校ニ健數部書一　授ニ家童一而備ニ文談著述之一助ニ云　延寶乙卯初夏　華頂隱士玄齋書」

以って本書の性格も知られるわけであるが、この序文を草した「華頂ノ隱士玄齋」とは、「毛利玄齋」すなわち「毛利貞齋」のことではあるまいか。何となれば、すでに「孝經大義詳略大全」に見たように、貞齋はその著に署名して

河東潛夫　毛利虚白（元禄三年刊「故事俚諺繪抄」）
洛遊隱士　毛利貞齋（同五年刊「増續大廣益會玉篇大全」）
華雒隱士　毛利貞齋（同十六年刊「音釋文段批評莊子鬳齋口義大成俚諺鈔」　同十七年〈宝永元年〉刊「通俗戦國策」　宝永四年刊「古文真實後集俚諺鈔」）
華雒隱儒　毛利貞齋（宝永五年刊「訓蒙助語辭諺解大成」）
京兆隱儒　毛利貞齋虚白（享保二年刊「重訂冠解助語辭」）
神邦洛下隱士　毛利貞齋（同十年刊「増補廣類願體俚諺鈔」）

とすることが多い。すなわち、「翰墨節用」に於ける「華頂ノ隱士玄齋」という著作者名表記は、他書に於けるそれと、まさに軌を一

にするのである。しかも前述の如く、この「翰墨節用」の前見返しには「虚白堂校閲」の文字があり、貞斎の名「虚白」が見えるのである。また本書の内容からしても、貞斎のものとして不都合な点は無い。とすると、本書は、貞斎の著作として新たに数え入れるべきではあるまいか。延寳第五丁巳稔（一六七七）仲冬吉辰　京都石橋源兵衛刊の「新編古今事類全書」に

洛下　新進　毛利氏玄齋校點」

と「新進」の名を冠せられている玄斎である。延宝三年四月序刊の「翰墨節用」あたりを、彼の活動の始まりに想定しても、無理はないであろう。以上のように玄斎すなわち貞斎とすれば、彼の著作活動は、本書を始めとして享保十年（一七二五）四月刊の「増補廣類願體俚諺鈔」に至るまで、約五十年間続いたということになるわけである。

本稿でこれから取り上げる「増續大廣益會玉篇大全」十巻は、その貞斎の名を不動のものとした著作である。因にこの時までに毛利貞斎は、語学関係の書として、「翰墨節用」、「龍頭助語辭」、「韻鏡秘訣袖中抄」、「校正増補訓蒙讀書字義」、「新編類字箋解」、「字韻早鑑大成」などを著わしている。

二、「増續大廣益會玉篇大全」

参小補韻會は字註くはしけれども文字すくなし。字彙はつねに用ゆべきものなれども。又文字の不足多し、たとひ字註は詳くとも。字数をのせ初心のもとめやすき字書はなきか　京　首書字彙を左に置。右に續字彙補をおかば、文字に事欠まじ。さりながら、貧学にして両部の書をもとめがたければ。頭書漢玉篇こそ、初学の字を引為によろしくゆ。毛利貞斎のあつめられし書に、

是程はやるは御座なくゆ

梅薗堂都の錦は、前にも引いた「元禄大平記」の巻六ノ一「日本の風にうつしてぞみる」の冒頭（目録に所謂「字引の事はいかにやく」の項）で、伏見の夜舟に乗り合わせた京の書林と大坂の本屋に、右の如き問答をさせている。たしかに、そこで言う「頭書漢玉

篇」――すなわち画引に改編した「玉篇（漢玉篇）」に大増訂を加え、「字彙」・「續字彙補」・「小補韻會」を中心とする百数部の書（首巻の引用書目によれば百五部、うち一点国書たる「和名類聚鈔」あり）を以て冠解（頭書）を付した「増續大廣益會玉篇大全」――は、数ある毛利貞斎の著作のうちでも、最大級に流布したものであった（註3）。その盛行ぶりは、後述するように、元禄五年（一六九二）の初刊以来明治も末の四十四年（一九一一）に至るまで、次々と版を重ね、時には、もう字書の用には立ち難いほど版面が磨滅していてさえ、刷りを重ね売り出されていたことからも、明らかであろう。それは、玉篇類に対する節用集の一方の雄、駒谷散人槇島昭武編の「和漢音釋書言字考節用集（増補合類大節用集）」十巻十三冊（元禄十一年〈一六九八〉序　享保二年〈一七一七〉初刊）の、開板度数・浸透度を、遙かに上回るものなのである。

やゝ時代が下るが、安政三丙辰歳（一八五六）孟秋発刊の三浦茂樹編「新鐫校正増補字林玉篇大全」横本一冊の巻末に付された「文海堂（敦賀屋〈松村〉九兵衛）蔵刻畧書目」は言う。

増續會玉編大全毛利貞斎先生編輯校本　全部十二冊

此書畫引中最第一ニシテ、原書説文・字彙・廣韻・小補勺會・字貫・品字箋・正字通・字典其余字書ノ中ヨリ據ヲ以テ増益シ、一字毎ニ出所ヲ附シ、字義・音訓・平上去入悉ク註釋シ、有益ナル丁他ニ百倍ス、故ニ博識ノ君子トイヘヒ、座右ニシテ頗ル鴻益ノ書ナリ

と。……たしかに本書は鴻益なる書であった。例えば、天保九年（一八三八）頃、秋田藩の藩校明徳館に於て、有用の書と認められて開板されたこと、岡山藩や徳山藩・大村藩、宮内省の調度局・侍医寮・諸陵寮・東宮御所御造営局庶務課・皇孫仮御殿、それに外務省や工部省・法制局・太政官記録編輯課・財務課・履歴課、東京裁判所等の備付図書として利用され、また寺社をはじめ堂上家・武家等にも蔵せられる等の、広範囲にわたる蔵弃・利用の跡を思いあわせる時、当時他に適当な字書が無かったという為もあろうが、本書が如何に鴻益な書であり、実用的な字引として認識されていたかを、十二分に知ることができるであろう。じっさい、首巻一巻と本文十巻、合わせて半紙本十二冊を通常の形態とする本書は、同時代同類の単字字典に比して、その収載字数・字注の多きを誇ったものゝ如

くであり、それ故に世に迎えられたものと思われる。勿論、一方、その大部・浩瀚なるがゆえ、後世、

字學之書以邦訓鮮其義者、以毛利氏玉篇為備矣、但以卷帙浩瀚、不便於提携、初學或苦之

（明治二十六年七月　博文館刊　淳軒大田才次郎編「新撰明治字典」序）

という批判がなされたり、繙読・携行の便を慮って薄葉刷や袖珍本が刊行されたりもし、またその内容上の誤りに対する

我邦ニ於テ、古ヨリ翻刻及ビ編輯刊行スル所ノ字書、一トシテ其正ヲ得ル者アルヲ見ズ、毛利貞齋ガ編纂セル大廣益會玉篇、鎌田環齋ガ編輯セル大廣益正字通、山崎美成ガ輯録セル文選字引ヲ始トシテ、玉篇、四聲字林等、誤謬ノ甚シキ、論ヲ待ズ、況ヤ其他ノ字書及ビ近世坊間ニ於テ刊行スル所ノ字引字類ノ如キニ至テハ、杜撰無稽極レリト謂フベシ

（明治十五年十月　旭昇堂刊　安田義和編「高等論説作文軌範」巻上・作文大意）

というきびしい指摘もあったが……。

ともあれ本書は世に容れられ、明治三十六年（一九〇三）二月刊　重野安繹・三島毅・服部宇之吉監修・三省堂編輯所編纂の「漢和大字典」を嚆矢とする近代的な漢和字典に、次第に取って代わられて行くまで、木版から鉛版・銅版・石版と、版を重ね、また明治期に編輯・刊行された他の単字字典に、相当の影響を与えて行くのである(註4)。

註1　享保十四年（一七二九）季冬吉辰　皇都書坊永田調兵衛刊　文照軒柴橋編の「新撰書籍目録」には、「初學指南鈔」の作者が「毛利瑚珣」となっている。しかし実際に「初學指南鈔」の現物にあたってみると、巻之一の内題左下方に「神雒　毛利貞齋述」、扉左方に「神洛　毛利虚白撰」とあり、本文の記述の仕方から見ても、父の貞斎自身の著作と見て、間違いないようである。毛利貞斎が講述したもの若しくは草稿の如きものを、息子である瑚珣が編纂し一書として纒めあげたと見ることも可能ではあるが、現物にこうある以上、貞斎のものとして差しつかえないであろう。但しこの目録では、「易學啓蒙合解評林」や「韻鏡袖中秘傳鈔」も毛利瑚珣のものとしており、普通貞斎のものとされる「四書集註俚諺鈔」に註して「大論ハ毛利瑚珣　中孟ハ同三省」と

あることや、当該書目の刊行者永田調兵衛すなわち編纂者文昌堂が貞斎の著作も刊行していること等を考え合わせると、瑚珣とするに足る何らかの根拠があるのかもしれない。いずれにしても、当時の書籍目録の性格も考慮したうえで、禅籍や仏書の註解書を何点か著わし延宝や元禄の書目にもその名が見える、おそらくは別人と思われる「虚白」と称する人物の問題と共に、他日述べるつもりである。なお貞斎の著作であることが明らかな「増續大廣益會玉篇大全」の安永九年版の刊記の左脇に、本書を説明して「毛利貞齋著」としているのも、「初學指南抄」が貞斎のものであるという説の証左たり得よう。因に明和六年（一七六九）十一月刊の「諸家人物志」では、「∴毛利貞齋　大坂人　古人　姓毛利　名瑚瑚　字[illegible]（マヽ）　号貞齋」となっており、こゝでも貞斎と瑚珣との混同がうかがわれる。

註2　刊本、小本一冊。「上天　―玄　―穹　―鈞　―蒼　大清　―圓」等、天に関する異名・別称から始まって、干支や月の異名、「〇林平地有ニ叢木一曰レ―」、「〇隱者　華陽ノ隱居　江湖散人　烟波釣徒　自耕テ而食フ　出ニ没ス烟濤一」、「〇音信　音耗　嘉音　書―　寄―　不通思　信聞　筆問　音―」などを経て、「〇称呼　状ノ名付ノ脇ニ書字也　閣下　三公ナドノ位ニ書字　座下　台座　惣テ貴人ニ用レ之　館下　尊前　足下　几下　函丈―　浄几下　師或ハ貴人ニ用レ之　衣鉢閣下　僧用之」に終る。部門表記は、前半の部分に於てはっきりしないが、後半は「人物」と「交際」の二つに分け、地位や職業に伴う呼び名や親族の呼称、人と人との交わりや生活の中で生ずる様々な状態や、書翰その他の手だてに関する漢語の類語および用語を集めている。特色としては、普通この種の異名集・類語集・韻書中に見られる草木や鳥獣魚虫に関する語を、全く収録していない点をあげることができる。

註3　元禄五年の「廣益書籍目録大全」や同十二年の「新板増補書籍目録」を見ると、「十一同（玉篇）畫引韻附毛利虚白作」なる字書と共に、「十二増續頭書漢玉大全」の名が掲載されている。この場合、後者がすなわち「増續大廣益會玉篇大全」を指していると見てよいであろう。但し著作者名は記されていない。それに対し、毛利虚白の名が見える前者「玉篇畫引韻附」十一冊は、延宝三年毛利文八輯刊の「古今書籍題林」や貞享二年の「廣益書籍目録大全」に、既にその名が掲出されているが、どれを指して言っているのかは未詳である。あるいは寛文三年や天和三年版系統の画引の「大廣益會玉篇」のことを称しているのであろうか。と

くに天和三年版「増補大廣益會玉篇」は、版元の一人が元禄五年版「増續大廣益會玉篇大全」通行本と同じ澤村昌益であり、大いに関係がありそうなのであるが。

註4　例えば、明治十年一月刊　鷗卿橘正淑編の「鼇頭新會玉篇大全」銅版中本十二冊は、新しく付加された序文をのぞいて、他は貞斎の「増續大廣益會玉篇大全」の丸取りに他ならない。「凡例」も、新しい点が多少加わってはいるが、大よそは貞斎の「凡例」の一部を採って、多少やわらかい表現で言っているに過ぎない。版式等よりしておそらく明治五年版に基づいていると思われ、言わば「増續大廣益會玉篇大全」の一異版とでも称すべきものである。

三、諸　本

「増續大廣益會玉篇大全」の諸本は、管見によれば次の如く十七類に分けられる。以下ほゞ刊行年次に順ってその書誌を記すことにするが、紙数の都合上、書型の大略は元禄五年通行本を以って代表させることゝし、他は異同のある場合のみこれを記した。また繁雑となることを恐れ、一々の字句等に関する異同は、今回省略に従った。また諸本の所在は、特別の場合を除き公開の図書館・文庫等のものに限って示した。

元禄五年版

(A1)　鍵屋善兵衛・澤村昌益版

半紙本十二冊

表紙　濃縹色無地紙。竪二十三・二、横十六・七糎。

題簽　書名・巻数を記した正題簽と、部首の画数・部首および丁数を示した脇題簽との、二種類がある。

(正)　子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上方に界線(乳付)を置き「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と三行に亙って角書きをし、その下に大きく「増續大廣益會玉篇大全」と書名を出し、右下に「首巻、巻一(〜巻十一)」までの巻数をやゝ小さく記す。

(脇)　太めの単枠付矩形白紙。首巻は上方に界線を置き(乳付)「首巻總目」と右横書きに記し、下方に「凡例／引用書目／四聲附韻目録／檢字」という具合にその内

容を表示する。他の巻は上方を乳付の界線で区切り「一二畫（三畫上＜下＞、四畫上＜下＞、五畫、六畫上＜下＞、七畫、八九畫、自十畫至十七畫）」の部首の画数を右横書きに記し、下方に部首およびその始まりの丁を無界竪三段に記す。第十一冊八九画のみは部首の欄の途中にも「九畫」と記す。部首掲載順序は各行タテに上から下へと移り、丁付は「葉」で示されている。なお終冊の部首四～五行目「鹿」部と「麻」部との間に「麥」部の表示が脱落している。

凡例　増續大廣益會玉篇大全／凡例」

末に「元禄第四辛未曆／大呂穀旦　洛遊隠士毛利貞齋編」とあり

引用書目　増續大廣益會玉篇大全引用書目」

内題　増續大廣益會玉篇大全首巻（巻第一　一二畫、巻第二　三畫、巻第三下三畫、巻第四上　四畫、巻第四下　四畫、巻第五　五畫、巻第六上　六畫、巻六下六畫、巻第七　七畫、巻八　八畫、巻第九　九畫、巻第十　十畫）」

尾題　首巻にはナシ。

（巻一）（9オ9行目）已上一畫部終」（終丁）一二畫終」

（巻二）増續大廣益會玉篇大全　三畫上」

（巻三）巻之三三畫下終」……

（巻四上）四畫上㒸」（一行置いて次に）増續大廣益會玉篇大全巻第四上　四畫」

（巻四下）已上四畫下㒸」（一行置いて次に）増續大廣益會玉篇大全巻第四下竟」

（巻五）五畫終／増續大廣益會玉篇大全巻第五」

（巻六上）已上六畫上㒸／増續大廣益會玉篇大全巻六上」

（巻六下）六畫下至於此㒸」（四行分置いて次に）増續大廣益會玉篇大全巻之六下」

（巻七）七盡（マヽ）大成」（三行置いて次に）増續大廣益會玉篇大全七盡（マヽ）終」

（巻八）八畫大成」（一行置いて次に）増續大廣益會玉篇大全巻之八」

（巻九）増續大廣益會玉篇大全巻九／九畫大成」

（巻十）（20ウ2行目）已上十畫大成」（46ウ3行目）已上十一畫終已下十二畫」（51オ3行目）已上十二畫畢已下十三畫始ノ」（54ウ8行目）已上十三畫竟已下十四畫」（56オ10行目）已上十四畫大成已下十五畫始」（59オ8行目）十五畫終已下十六畫」

（60ウ3行目）已上十六畫大全 已下十七畫大尾」（61オ3行目）右至十七畫大尾」（六行分の間に刊記を入れ最終行に）増續大廣益會玉篇大全巻十　大尾」

刊記　巻十終丁（61）オ五行目から九行目にかけて

此書首尾校正毛利香之丞筆著

元祿第五壬申大呂中旬

鍵屋善兵衛開板

澤村昌益

とあり。他の文字との釣合から見て、あるいは書肆名の部分は入木か。

柱刻

（首巻）

〈凡例	乙
〈書目	三
〈韻目	五
首巻	六

（二）

（四）

（～九、十一～二、二十二～四）

首巻	十
	十三

（～十六、二十）

	十七
首巻	二十一

（～十九）

（その他の巻）冠解の部分には無く本文の部分のみに次のようにある。

十	乙
十	二
十	三

右図の如く、上部に巻数を出し、下部に丁付を記す。巻数の下、丁付の上には界線が置かれているが、どちらか片方、あるいは両方の界線の見えない丁もある。黒い部分は一丁毎に一つ分づつ下にずれて行き、十丁目で

十	十

と丁付のすぐ上まで来るようになっている。

丁付　（首巻）乙、二～二十四　（巻一）乙、二～六十五　（巻二）乙、二～四十八　（巻三）乙、二～四十六　（巻四上）乙、二～五十六　（巻四下）乙、二～八十六　（巻五）乙、二～七十六　（巻六上）乙、二～六十五　（巻六下）乙、二～五十七　（巻七）乙、二～七十九　（巻八）乙、二～三十八　（巻九）乙、二～二十七　（巻十）乙、二～六十一

丁数　（首巻）二十三丁半〈終丁ウは後見返しに貼付〉（巻一）六十五丁　（巻二）四十七丁〈初丁および終丁は各々前見返し、後見返しに貼付〉（巻三）四十六丁　（巻四上）五十五丁半〈終丁は後見返しに貼付〉（巻四下）八十六丁　（巻五）七十五丁半〈終丁は後見返しに貼付〉（巻六上）六十五丁　（巻六下）五十六丁半〈終丁は後見返しに貼付〉（巻七）七十九丁　（巻八）三十八丁　（巻九）二十七丁〈すなわち第十一冊目は合計六十五丁〉（巻十）六十丁半〈終丁は後見返しに貼付〉

行数　本文見出し有界十行、双註あり。冠解は無界二十行。ともに漢字片仮名まじり。返り点・振り仮名等あり。訓は双註より更に小さく割って出している場合がある。

匡郭　三周単辺。但し大部分の丁は、その中に、本文部分の枠（有界）を組む。竪二十一・五一、横十四・五二。本文枠は竪十六・五、界幅一・四三糎。

分巻　（第一冊　首巻）凡例、引用書目、四聲附韻字總目録、検字〔題簽巻分け「首巻」〕（第二冊　巻一）一二画〔同「巻一」〕（第三冊　巻二）三画上〔同「巻二」〕（第四冊巻三）三画下〔同「巻三」〕（第五冊　巻四上）四画上〔同「巻四」〕（第六冊　巻四下）四画下〔同「巻五」〕（第七冊　巻五）五画〔同「巻六」〕（第八冊　巻六上）六画上〔同「巻七」〕（第九冊　巻六下）六画下〔同「巻八」〕（第十冊　巻七）七画〔同「巻九」〕（第十一冊　巻八巻九）八画・九画〔同「巻十」〕（第十二冊　巻十）十画～十七画〔同「巻十一」〕

備考　本書が元禄版の通行本である。

巻五は、冠解の見出し字の掲出様式が、他巻と異なる。すなわち四十二オまでは、○国　㊀寶玉陽精之純という具合に○□の型が基本となっているのであるが（九オ～十ウにかけては○〔　二十三オ～ウは○〔）、四十二オ途中からは、○○もしくは○〔となり、さらに七十オからは、〔又

は𠂉となるといった具合に、他巻の𠂉とは異なっているのである。

所在　国立国会図書館亀田文庫（改装合四冊　東坊城旧蔵）　書陵部（徳山藩旧蔵）　東京大学図書館南葵文庫（改装　第十一冊八九画は安永版後印の改装本による入れ本）　東北大学図書館狩野文庫　高野山大学図書館（三本　一は持明院寄託本〈若州中山寺正寿院諦之旧蔵〉　一は宝城院寄託本〈改装合四冊〉　もう一本は首巻のみ存　三宝院寄託本）　神宮文庫

首巻の一オから二ウにかけて貞斎の署名入りの凡例がある。本書の成り立ちに関連する重要なものであるゆえ、やゝ長くなるが、次に掲載することゝする。

増續大廣益會玉篇大全

凡例

一、玉篇之書傳本朝已來用和字贅其音其訓於其側其下繡梓頒行尚矣。予歴年閲之。音訓俱不正。料固陋之徒加臆見而惑世者也

一、近世音訓仍舊欲便検閲破舊本部新模梅氏之字彙例。從字畫件件有分之者。又別撮拾字彙所出玉篇不連字增加音訓刋行有流布世者上矣

一、分畫玉篇新舊兩編者不辨字畫製造之義。謾從篇從旁混雑。又畫數多少之失不少。且惑篇疑旁者七千字余脱落之

一、今所撰編者改舊本分畫之差。訂音訓之謬

且本字脱落註釋誤字逐一革之者也

一、今所續補字不出舊本。而切日用者。又字畫異而素同者。如佛又作仏　害父作害類　經史及釋典中間出庸學難解者。考諸字韻之書連系之。毎部畫數末包囲中記之者可知補字矣

一、凡舊本註及冠解中謂某與某同者。又古文籀文記某。又某俗字之類。槩其下不贅訓義。捜與某同字可暁之　如下拉同丘。倆古文夙。孑籀文乃。乱俗亂字上類是也

一、予所贅音訓根舊本反切註釋。有他音他義之區者。捜羅他字韻書及經史子集。別冠本文頂。釋其音其義。庶幾為使識音異則訓亦

異兼韻同而訓異。又從連綿義差異也

一、冠解所引書。多用韻會又字彙。所載其解詳而得其樞要也

一、本文下及冠解。毎字施四聲韻字者爲使曉某字用某義則爲其韻矣

一、冠解所贅。毎字下雖系韻字反切間亦闕之纔記引用書題及字註者本註韻又反切字同則略之

一、冠解雖引字韻書所出註解經史所用證。至本文下所註相同者刊除之。其餘異義連記之。

一、冠解所引諸書題厭長纔記二字。其詳見下引用書目圈内下斷者可明矣

元祿第四辛未曆

大呂穀旦　洛澁隱士毛利貞齋編」

（A2）　永田調兵衛・林治兵衛版

刊記　巻十終丁オ五行目から九行目にかけて

此書首尾校正毛利喬之丞筆著

元祿第五壬申大呂中旬

錦小路新町西へ入町

大宮通三條上ル町　永田調兵衛　林氏治兵衛　開版

とある。すなわちA1本の刊記の書肆名の個所を、入木により入れかえたものである。

備考　A1本の後刷り本である。刷りはA1本に比べて相当に劣り、字書としての用をなさぬほど版面の磨滅している個所が多い。

所在　山梨県立図書館徽典館文庫（首巻欠　十一冊）

（A3）　無刊記本

大本十二冊

表紙　縹色無地紙。竪二十八・八、横十九・三糎。

刊記　無し。当該個所は空白のまゝになっている。

備考　本書には刊記が無いが、元祿版の特色を備えている。例えば元祿版には

仉（ヘンカロシ）■扶■孚劒二ノ切輕也（巻一―15オ）

等と未刻のまゝ黒く、言わばゲタを履いた様な状態になっている個所が七ケ所あるが、本書にもそれが存する。また

字画や匡郭の欠損個所等も、殆どA1本と一致する。すなわちA1本と同一版木を使用していることは間違いないのであるが、刷りがその元禄版通行本たるA1本と比べて甲乙つけ難い状態にあり、俄にその先後は決め難い。前にも記した如く、A1本の刊記の書肆名は入木によるものかと思われる。その点から見て、あるいは無刊記の本書の方が初版に近いのではあるまいかとも想像されるが、この形態の本を現在のところ僅か一本しか寓目していないので、断定は差し控えておくことゝする。

所在　書陵部

享保二十年版

(B1)　浪華五書肆版

半紙本十二冊　大本もあり。

表紙　縹色無地紙。

題簽　様式は元禄版に同じなれど、異版。終冊の脇題簽四行目から五行目にかけての、「鹿」部と「麻」部との間に「麥」部が脱落しているという誤りは、そのまゝ踏襲している。

内題・尾題等　元禄版に同じ。

尾題のうち、巻七の「七畫」とあるべき個所が「七盡」となっている点も、そのまゝ踏襲している。

刊記　巻十終丁オ、尾題にはさまれた五行目に「此書首尾校正毛利喬之丞筆著」とあり、同ウに

享保二十歳乙卯初冬吉日
大野木市兵衛
松村　九兵衛
石原　茂兵衛
浪華書肆　澁川清右衛門
鳥飼　市兵衛

とある。

備考　本書は元禄版を被せ彫りに近い方法で覆刻したものである。柱刻なども、ほゞ似せてある。巻五の冠解の出し方も殆ど踏襲している。なお、A3本のところで紹介した元禄版に於ける未刻の個所は、本書では四ヶ所に減っている。また、本の大きさとしては半紙本のものが普通であるが、元禄版A3本と同じ様な大本もある。勿論これは天地・左右の余白が多いということを意味し、版面の大きさ等に変わりがあるわけでは無い。各冊はじめに遊び紙一丁宛を付

す。

所在　書陵部（東宮御所御造営局庶務課旧蔵）　岡山大学図書館
　　池田文庫（二部）

（B2）　浪華六書肆版（イ）

表紙　濃縹色無地紙

題簽　B1本に同じ。刷り悪し。

刊記　巻十終丁オはB1本に同じ。終丁ウは新たに版をおこして

享保二十歳乙卯初冬吉日

大野木市兵衛
松村　九兵衛
石原　茂兵衛
澁川清右衛門
同　與　市
鳥飼　市兵衛

浪華書肆

とある。すなわちB1本の五書肆に渋川與市が一名加わっている。

備考　刷りはB1本より劣る。

所在　慶応義塾大学国文学研究室　高野山大学図書館　前田育徳会尊経閣文庫（改装）

（B3）　浪華六書肆版（ロ）

表紙　縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し

題簽　正・脇とも刷りが悪い。

（正）　子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上部を界線（乳付）で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と三行に分けて角書きをし、下方に「増續大廣益會玉篇大全」と書名を大きく出し、その真下に「子」～「亥」までの十二支を小さく記して、各冊の順序を示し、その左脇に「首巻」、「一二畫」～「八九畫」、「自十畫至十七畫」という具合に記して、収録されている部首の画数を示す。

（脇）　子持ち枠付矩形白紙。上部を横界線（乳付・子持ち）で区切り、部首の画数（首巻は「首巻總目」とあり）を右横書きに記す。下方は十行三段（首巻は十行一段）に界線で区切り、部首および丁数（首巻は内容標目のみ）を記す。部首掲載順序は各段右端が始まりで、各々左方に移って行く。丁付は「葉」。なお終巻の「麥」

部の表示は正しく入っている。

刊記　B2本に同じ。

備考　刷り相当に悪く、字書の用に立ち難い個所もある。

所在　東京大学図書館（東京医科大学精神病学教室旧蔵）

（B4）　定栄堂吉文字屋市兵衛発賣本

表紙　薄縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し

題簽　B3本に同じ。

刊記　B2・B3本に同じ。

備考　本書には、次に記すように、大坂心斎橋南四町目　定栄堂吉文字屋市兵衛――すなわち本書の版元の一人である鳥飼市兵衛――の蔵版目録が、見返し等十六ケ所に亘って付されており、享保二十年六書肆版、それも表紙・題簽の形状よりしておそらくB3本の、後印本であることを知る。蔵版目録は、第二冊前見返し「筆道書品目」十八点、第四冊前見返し「詩文書品」十三点、同後見返し「儒書暦書品目」十四点、第五冊前見返し「儒書品目」十一点、第八冊前見返し「石刻目録」二十一点、第十二冊後見返し「字書品目」七点等となっている。而してその発賣時期は定かではないが、例えば、第十冊の後見返しにある四点の書物の広告のうち、「改正道中行程細見記」全一冊の解説中に、「右ノ書天明年中ニ板行スレドモ、國郡相分リガタキ故、此度一國ヅヽニ色ヲカヘ彩色仕候、其外重宝ノ事品々増加ヘ候、寛政七年ノ新板ト御タヅネ可被下候」とあり、少くとも寛政七年（一七九五）以降のものであることがわかる。「寛政ノ校正増補ニデ御坐候」とある「刪補錦嚢外療秘録」が、「享保以後大阪出版書籍目録」によれば寛政七年六月の許可であり、第十一冊前見返しの「經學抜錦國字解」が、寛政七年十二月の申出であるのも、それを裏付けよう。ところが、さらに見て行くと、第十一冊の後見返しにある広告の中に「日本月令筌」がある。これは前出の「享保以後大阪出版書籍目録」によると、享和二年（一八〇二）二月の申出ということになっている。はたしてそれであるとすると、それと関連して注目すべき書に「大成（大全）正字通」が浮かび上がって来る。これは、当時にあって索引方法に新機軸を打ち出した字引であり、「急用間合即座引」等と共に、その推進者たる吉文字屋市兵衛が、天明から化政期にかけて、盛んに宣伝したものである。

「大成（大全）正字通」横本三ツ切一冊は、イロハ分けの見出し語を発音上の特徴から「すむ、にごる、ひく、はねる」の四つに分類し、それと意義分類との二本立てによって求める語を検出できるように考案された、明和五年（一七六八）刊穂積義雄撰の「連城節用夜光珠」に始まる一連の字引の流れを汲むものであるが、これに天明二年（一七八二）版と享和二年（一八〇二）版の二種がある。この二版の分類方法の相違点については、既に山田忠雄氏の御指摘があるが（「語末辞書として見た〝韻さぐり〟」）、例えば「にごる」の分類基準として、天明版は語末に濁音があるかどうかで判定しているのに対し、享和版では語句の音節のいずれかに濁音があればすべて「にごる」の部類に収める、という違いがある。

さてこのB4本に付された吉文字屋市兵衛の広告を見て行くと、「大成（大全）正字通」は二ケ所に亘り各々解説付で出て来る。すなわち一は「大成正字通」の名で、第四冊前見返しの「儒書暦書品目」中に見られるものであり、一は第十二冊の刊記のある丁の後に付された二丁分の広告のうち、二丁目をすべて費して「急用間合即座引全本大全正字通」の名で詳しい内容案内を伴って出て来るものである。而してその後者の方を眺めてみると、「未レ得ニ御意ニ」に註して「㋑ノ部ノニゴルニアリ」とあり、「出會申ゆ」に対し「㋑ノ部ノスムニアリ」と説いている。実はこれは「大成正字通」天明版の特色を示しているのである。何となれば、享和版では「出會」の方も音節の中に「で」という濁音を含むゆえ、「ニゴル」の中に分類されるからである。したがって、この「大成（大全）正字通」の広告があることを以て、B4本の発賣時期を享和まで引き下げるということは、一応不可能ということになる。ところが、この「大全正字通」の広告を見ると、非常に刷りが悪い。この種の広告は同じものが何種類もの何部もの本に付けられるから、刷りが甚しく劣る場合も多く生ずる。したがって、刷りが悪いからと言って、とやかく論うことは危険であるかもしれないが、筆者はこれを享和期以降のものと考えたい。つまり享和二年に「大成正字通」の改訂版が出た時に、天明版のための広告であったものを、そのまゝ流用したと見たいのである。というのは、さらに見て行くと、同じ第十二冊の終丁の次、「大全正字通」の広告の前に、より後に刊

行された「月令博物筌」の広告があることに気付くからである。すなわち「此書編述シテヨリ凡三十年ノ間・儒者・佛者・和學者・職原家・哥人・誹人・天文者・其外諸先生ノ訂正ヲ歴テ・漸ク當年書ナル・」とある本書は、文化元年（一八〇四）十二月から同五年（一八〇八）九月にかけて刊行された「改正月令博物筌」を指していると考えられるからである。

斯くして、このB4本の発賣時期は、文化年間の初め頃かと推定される。ところが、こゝに、やゝ不審な点がある。それは、後述するように（C2本解題参照）、安永九年版にも、ほゞ同様な吉文字屋市兵衛の広告が付されて発賣されている後印本が存するからである。安永九年（一七八〇）の後、「増續大廣益會玉篇大全」の新たなる開板は、天保五年（一八三四）まで空くから、安永版に享和頃発刊の書物の広告を付けた後印本が存しても、何ら不思議ではないであろう。ところが、安永版の前身たる享保版に、それとほゞ同時期の刊行にかゝる書籍類の広告を付した後印本が存する。これはやゝ不思議である。表紙や見返しのみ付け代えたということも考えられるが、検するに原装のまゝでそういう細工は無いように見受けられるのである。享保版の後に安永版が新版として出たということは、普通、享保版の版木が磨滅するか等して使用に耐えなくなったことを、したがって賣る側にとっては、現物が品切れになったということを、意味するはずである。この場合、両者の版元の大半が重さなり合っているので、余計そう考えてよいはずである。勿論、享保二十年（一七三五）から安永九年までも、かなり間が空くから、後印本があってしかるべくである。事実享保版には、版面がひどく疲れて、字画や註文その他が読み得ぬ程刷りの悪くなってしまっている後印本も存する。（本書も勿論刷りが悪い）。しかし、もしその後印本に広告を付すとすれば、安永九年版が出るまでの、元文～安永八、九年頃までの刊行にかゝるものを掲載するのが、普通なのではあるまいか。このB4本の場合は、あるいは吉文字屋が、たまたま自分の手許に賣れ残っていた享保版に広告を付けて、文化頃に賣ったものなのであろうか。筆者蔵。

安永九年版

（C1） 浪華六書肆版

表紙　濃縹色地紙に雷菱（又は紗綾形）・唐草模様空押し。

題簽　B3本と同形式。

首巻前見返し　今までは本文共紙の白紙であったが、この安永版より著者名・大題・刊年等が記されることゝとなり、以後の版は大体これを踏襲する。

子持ち枠付。竪に子持ち枠で真中の部分がやゝ幅広くなるように三ツ割にし、中央に「會玉篇大全」と大きく出し、右の欄に「毛利貞齋先生著」の字と「千里必究／不許翻刻」の模刻印形を入れ、左の欄に「安永九年庚子再刻校正監本」の年記を入れる。

目次　首巻をのぞき各冊前見返しにあり。これも安永版から始まるものである。子持ち枠付。上部を子持ち枠で横に区切り、部首の画数を右横書きに大きく記す。下部は単線で十行三段に区切り、部首とその始まりの丁数を各々記す。丁数は「葉」で示す。

刊記　終丁オは享保版に同じ。終丁ウに

舊板再治享保廿年乙卯初冬

新校刊布安永九年庚子初冬

浪速書肆

大野木市兵衛

松村　九兵衛

淺井德右衛門

澁川與左衛門

澁川清右衛門

鳥飼　市兵衛

とあり、その左脇に界線を置いて「初學指南抄」の広告を次の様に出す。

初學指南抄　全冊毛利貞齋著○朱引指南唐土歴代要覽廿一史大署經書詩文讀法指南ヲ委ク載經文出所ヲ記シ初學ノ為ニナルヿヲ集ム」

因に「享保以後大阪出版書籍目録」によれば「大廣益會玉篇大全」十二冊、板元吉文字屋市兵衛、出願安永九年四月、許可安永九年五月九日。

備考　享保版に基づき再刻したもの。巻五の冠解の出し方の不統一は、享保版とは多少異なるが（例えば七十一オ・ウ、七十二ウが〇）やはりある。未刻の個所は一ケ所に減っている。

所在　国立国会図書館新城文庫　岡山大学図書館池田文庫（二部）

金沢大学図書館（二部）　京都大学図書館　東京大学図書館

上田市立図書館藤蘆文庫　神宮文庫　都立中央図書館　無窮会図書館織田文庫（首巻および巻七入れ本）

（C2）　吉文字屋市兵衛発賣本

刊記等　C1本に同じ。

備考　第四冊後見返し（「詩文書品」十三点）や第十冊後見返し（「儒書暦書品目」十四点）等、七ヶ所に亘って、大坂心齋橋南四丁目　定栄堂吉文字屋市兵衛の蔵版目録が付されている。貞斎のものとしては「補正初學指南抄」が二ヶ所に出て来るが、その他「大成正字通」をはじめB4本の広告にあった書名と重さなるものが多く、広告の様式もそれに似る。発行年月を推定する参考になるものとしては、前記の「大成正字通」のほか、寛政十一年（一七九九）十一月出願の「医療衆方規矩」、享和三年（一八〇三）二月許可の「妙術博物筌」等があげられる。享和末年から文化初年頃にかけての発賣本か。筆者蔵。

因に、貞斎のものとしては、宝永元年（一七〇四）五月刊の「通俗戰國策」にも、「妙術博物筌」を含む享和末年頃の定栄堂の広告が付されている本がある。また貝原損軒・好古の「日本歳時記」や有賀長伯の「増補歌枕秋の寝覚」にも、同様の広告が付されている後印本がある。

天保五年版

（D1イ）　十二冊本

題簽　B3本と同形式。

首巻前見返し　安永版と同形式。

子持ち枠付。真中が幅広くなるように竪に三ツ割にし、中央に大きく「會玉篇大全」と書名を出し、右に「毛利貞齋先生著」の著者名と「千里必究／不許翻刻」の模刻印、左の欄に「天保五年甲午再刻校正監本」の年記等を記す。これが前表紙と離れていて、扉紙のウラの如き位置にあるものもあるが、場所が変わっているだけで、版面は同じである。

目次　安永版と同様にあり。但しこれも各冊前見返しではなく、扉紙オモテや同ウラの位置に刷られている本がある。が、位置が異なっているだけで、やはり同版である。

刊記　終冊終丁オは享保版と同形式。次丁ウに次の如くあり。

天保五歳甲午初春吉日

松村　九兵衛
同　清　助
和田治良兵衛
澁川清右衛門
柳原　喜兵衛
米田清右衛門

浪華書肆

備考　巻五の冠解の出し方の乱れはこれにもある。安永版と異なるところは、これは巻五の七十三オ～四ウが⌒となっている点であり、七十一オ～ウ・七十二ウは⌒で統一されている。また未刻の部分はすべて無くなっている。

所在　国立国会図書館亀田文庫　書陵部(二部)　東京教育大学図書館　岡山大学図書館池田文庫　高野山大学図書館（光台院寄託本）　神宮文庫(二部)　茨城県立図書館(首巻欠)　無窮会図書館平沼文庫

(D1ロ)　薄葉刷本

半紙本三冊

表紙　淡金茶色布貼。

上巻扉オ　D1イ本首巻前見返しに同じ。

目次　各巻の扉オの位置にあり。

刊記　D1イ本に同じ。

分巻　(上冊)首巻～巻三＜三画下＞　(中冊)巻四＜四画＞上～巻六＜六画＞上　(下冊)巻六＜六画＞下～終巻＜巻十＞

備考　D1イ本と同版。

所在　東京大学国語研究室（題簽後補墨）

秋田藩明徳館版

(E1イ)　十二冊本

表紙　濃縹色地紙に卍つなぎ空押し模様のものや、栗皮色地紙に唐草・花紋空押し模様のもの、濃縹色地紙に紗綾形・唐草模様空押しのもの等がある。

題簽　正のみあり脇題簽は無し。子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上方に界線を置き、「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と三行に分けて角書をし、下に「校正増續大廣益會玉篇大全」と題簽題を記し、その下に「子」～「亥」の十二支による冊序表記、その左に「首巻」、「自一書至三書」～「自十書至十七書」の収録部首の画数表示がある。

首巻前見返し　白紙。

目次　各冊扉オの位置にあり。安永版・天保版と同形式なれど、両本に見られなかった首巻にもある。すなわち子持ち枠内の上部を子持ち界線で区切り、「首巻總目」と右横書きに大きく出し、下方を罫線で竪十行に分け（はじめの六行分は途中までしか罫が無い）、「凡例／引用書目／四聲附韻目録／檢字」と四行に記し、その下約六行分を費して、「烋田藩／明德館／藏版記」とある大型方形印を模刻する。

刊記　終巻終丁オの本文枠内五行目～八行目、同ウの本文枠内一～八行目を、黒塗り様に刻してある。したがって終丁オは本文末の「右至十七畫大尾」と最終行の「増續大廣益會玉篇大全巻十　大尾」の尾題のみ存し、他の版にある「此書首尾校正毛利喬之丞筌著」の字句が無い。

備考　本書は天保版に基づいての翻刻であろう。例えば巻五の冠解の出し方も、天保版のそれと一致する。而してその刊行時期は、天保五年～九年（一八三四～三八）の間、限定すれば天保九年であろう。それは次のような理由による。まず、首巻扉にその名の見える秋田藩藩校明徳館は、はじめ明道館と言った。寛政元年（一七八九）七月七日に、秋田藩主佐竹家二十九代の義和公が学館創設を発表。同二年二月竣工し、同五年明道館と称するようになったものである。そして〔明德館教授日記〕（県立秋田図書館蔵　写本一冊）文化八年十二月三日の条によれば、「御学館明道之名被改置ゟ（見消ち）而、今日明德与可奉称之旨被仰渡ゟ」とあって文化八年（一八一一）十二月三日以後、明德館と改称されたことがわかる。（であるから、もし万一本書が天保版に先立つものであると想定しても、この時点よりは遡り得ないことになる。）また明治八年（一八七五）に、その佐竹家の流れを汲む佐竹義脩が、本書を再版するにあたって官許を願い出た時の書類の写しが、同図書館に蔵されている（丁本解題参照）。それによると「其中誤謬ヲ校訂シ重刻出板天保九年ヨリ所持罷在候處」云々とあって、本書が天保九年までの開板であることを知ることができる。版式等を勘案するに、天保五年版は安永九年版に基づき翻印されたものであり、明德館版はその天保五年版による翻刻であると考えて不自然ではないであろう。すると、本書は、天保五年～九年の間、さらに限定して天保九年の版行ということになる。

所在　東北大学図書館狩野文庫　東京教育大学図書館　秋田県立

秋田図書館（四部　一は狩野文庫　一は岡文庫本）

（E1ロ）　薄葉刷三冊本

大本三冊

表紙　暗金茶色布貼。

題簽　子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上部を界線で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と角書し、下に「校正増續大廣益會玉篇大全」と書名を出す。巻序や部首の画数表示は無い。

目次・刊記等　E1イ本に同じ。

分巻　（上冊）首巻～巻四上　（中冊）巻四下～巻六上　（下冊）巻六下～巻十

備考　刷り悪く字書として不適当な程に字画その他のはっきりしない個所がある。E1イ本と同版。

所在　都立中央図書館諸橋文庫

（E1ハ）　薄葉刷四冊本

大本四冊　濃縹色布貼帙入り

題簽　帙の中央にE1ロ本と同じものがある。

表紙　金茶色布貼のものや、濃暗紺色二重菱格子模様入り布貼り、香色無地紙のもの等がある。

目次・刊記等　E1イ本に同じ。

分巻　三種類ある。（第一冊）首巻～巻三＜三画下＞又は首巻～巻二＜三画上＞（第二冊）巻四＜四画＞上～巻五＜五画＞又は巻三＜三画下＞～巻四＜四画＞下、或は巻四＜四画＞上下（第三冊）巻六＜六画＞上～巻七＜七画＞又は巻五＜五画＞～巻六＜六画＞下（第四冊）巻八＜八画＞～巻十又は巻七＜七画＞～巻十＜自十画至十七画＞

備考　刷り悪く、字書としての用に立ち難い個所も多い。E1イ、E1ロ本と同版。

所在　東京大学国語研究室

無刊記本

（F1イ）　十二冊本

表紙　海緑青色地紙に紺青色の小菊入り亀甲紋等を捺す。

題簽　E1イ本に同じ。

首巻前見返し　白紙。

目次　首巻をのぞきE1本と同じ。首巻は、子持ち枠内の上部を子持ち界線で区切り、「首巻總目」と右横書きに大きく出し、その下方を罫線で十行三段に割り、「凡例／引用書目／四聲附韻目録／檢字」と上段右タテ四行に記す。すなわちE1本に比して、三段に分けてある点と明徳館の蔵版印が無い点で異なっている。

刊記　E1本に同じ。

備考　首巻扉オの目次をのぞき、明徳館蔵版本と同一版木を使用している。刷りが明徳館版より僅かに若い感じのする本もあるが、その先後および刊行事情は不明である。

所在　秋田県立秋田図書館（嘉永七年秋九月の書き入れあり）

（F1ロ）　薄葉刷三冊本

半紙本三冊

表紙　金茶色布貼。

刊記・目次　F1イ本に同じ。

分巻　（上冊）首巻～巻三＜三画下＞　（中冊）巻四＜四画＞上～巻六＜六画＞上　（下冊）巻六＜六画＞下～巻十＜自十画至十七画＞

備考　F1イ本と同版。

嘉永七年版

（G1イ）　大阪四書肆本

半紙本十二冊

表紙　濃黒渋茶色地紙に雷菱・唐草、又は縹色渋引き地紙に紗綾形・唐草模様空押し。空色地紙に紗綾形・飛雲・圏竜紋空押しのものもあり。渋が引いてあるのは、保存強度を増すためであり、「増續大廣益會玉篇大全」の場合、嘉永版以降のものに多く見られる様式である。

題簽　子持ち枠、角書欄乳付。享保版B3本、安永版、天保版と同形式。

首巻扉オ　安永版、天保版前見返し等と同様式。子持ち枠付。子持ち界線で中央の欄がやゝ幅広くなるように、竪に三ッに区切り、中央に「會玉篇大全」と大きく書名を出し、右の欄に「毛利貞齋先生著」の字句と「千里必究／不許翻刻」の印形模刻、左の欄に「嘉永七年甲寅五刻校正監本」の年記を記す。

目次　首巻をのぞき各冊扉オの位置にあり。安永版、天保版と同

型式。

刊記　終冊終丁オは享保版・安永版・天保版と同じ。終丁ウに

嘉永七歳甲寅初春吉日

松村　九兵衛
同　清　助
大阪書肆　和田治良兵衛
柳原　喜兵衛

とあり。

備考　本書は天保五年版に基づいている。巻五の冠解の出し方も、天保版と同じである。秋田藩明徳館蔵版本や無刊記の「校正増續大廣益會玉篇大全」から来ているもので無いことは、題簽題が異なること、天保版と同じ様に首巻には目次が無いこと、等から明らかであるが、例えば、元禄版以来安永版まで未刻の部分があった巻四上・四十三ウ一行目の「斆」の反切を見ても、わかる。すなわち、

「斆（フシグク）、國音于切布ク也陳ル也亦作レ敷ニ」

という具合に未刻のまゝの部分があった反切の一部が、天保版に至って初めて「苦于切」と完全なものになったのであるが、本書もそれをそのまゝ受けついでいる。同じく天保版に基づいて開板されているはずの明徳館版・無刊記版では、それが「芳于切」となっているのである。（因に、寛永八年や寛文三年四月刊の付訓本「大廣益會玉篇」では当該個所が本書と同じ「苦于切」とあり、寛文四年の「新刊大廣益會玉篇（増修玉篇）」では「芳無切」となっている。）

なお「享保以後大阪出版書籍目録」によれば

會玉篇大全　十二冊　再板発行申出
板元　敦賀屋九兵衛
右板元よりの申出でを本屋行司にて聞届け板行
申出年月　嘉永六年十二月五日

とある。この四書肆の中では、松村九兵衛すなわち文海堂敦賀屋九兵衛が主導権を握っていたのであろう。

所在　国立国会図書館　京都大学図書館（菊亭家旧蔵）　高野山大学図書館（正祐寺寄託本）　宮城県立図書館　蓬左文庫

（G1ロ）　四書肆薄葉刷本

大本三冊

表紙　金茶布貼。

刊記等　G1イ本に同じ。
分巻　（上冊）首巻・巻一〈一二画〉～巻三〈三画下〉（中冊）巻四〈四画〉上～巻五〈五画〉（下冊）巻六〈六画〉上～巻十〈自十画至十七画〉
備考　G1イ本と同版。
所在　書陵部

（G2）　四書肆・敦賀屋九兵衛版

表紙　縹色地又は黒渋茶色地紙に雷菱・唐草模様空押し。
題簽　G1イ本と同じ。
首巻扉オ・目次　G1本に同じ。
刊記　終冊終丁ウにG1本と同じく大阪四書肆のものあり、後見返し匡郭内に

京都寺町本能寺前　錢屋惣四郎
三都　江戸日本橋一丁目　須原屋茂兵衛
同　淺艸茅町　須原屋伊八
同　芝神明前　岡田屋嘉七
發行　同　日本橋二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　和泉屋吉兵衛
同　横山町一丁目　出雲寺萬次郎
書房　大坂心齋橋南一丁目　敦賀屋九兵衛版

と八書肆名を連記する。すなわち四書肆版後印の敦賀屋（松村）九兵衛版である。前引安政三年七月刊「新鐫校正増補字林玉篇大全」巻末広告中の「増續會玉編大全」は、あるいはこのG2本を指して言っているのであろうか。それともG1本のことか。
備考　刷りはG1本に比べて劣る。
所在　東京大学図書館南葵文庫

（G3イ）　大阪六書肆本

表紙　黒渋茶色地又は縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。紫青色地紙に唐草模様空押しのものもあり。
題簽　G1イ本に同じ。但し刷り悪し。
首巻扉オ・目次　G1本に同じ。刷り悪し。

刊記　終巻終丁ウに

嘉永七歳甲寅初春吉日

山内五良兵衛

松村　九兵衛

同　清　助

大阪書肆

梅村　彦七

和田治良兵衛

柳　原喜兵衛

とあり。嘉永七歳云々の年記と「大阪書肆」の部分だけ残し、山内五良兵衛以下六名の書肆名を新たに入木したものか。

備考　刷りはG2本よりさらに劣り、字書としての利用に支障を来たしている本が多い。

所在　書陵部　岡山大学図書館池田文庫(二部)　蓬左文庫　水府明徳会彰考館文庫(工部省旧蔵)

(G3ロ)　六書肆薄葉刷本

大本三冊

表紙　暗金茶色布貼。

首巻扉オ・目次　G3イ本に同じ。

刊記　G3イ本に同じ。

分巻　(上冊)首巻・巻一〈一二画〉～巻三〈三画下〉　(中冊)巻四〈四画〉上～巻六〈六画〉上　(下冊)巻六〈六画〉下～巻十〈自十画至十七画〉

備考　G3イ本と同版。刷り悪し。

所在　秋田県立秋田図書館

(G4)　六書肆・象牙屋治郎兵衛版

表紙　渋引黒色地紙に雷菱・唐草模様空押し、又は縹色地紙に唐草模様空押し。

題簽　G3イ本に同じ。刷り悪し。

首巻扉オ・目次　G3本に同じ。刷り悪し。

刊記　終冊終丁ウにG3本と同じ嘉永七年の山内五良兵衛～柳原喜兵衛の大阪六書肆のものがあり、後見返し匡郭内に

發行　江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛

同　二　丁　目　山城屋佐兵衛

同　芝神明前　岡田屋嘉　七

京御幸町御池南　菱　屋孫兵衛

書房　大阪心齋橋南一丁目　敦賀屋九兵衛
同北久宝寺町　敦賀屋彦　七
同堺筋金田町　象牙屋治郎兵衛

とある。象牙屋治郎兵衛はすなわち六書肆の中の終りから二番目にある和田治良兵衛のことである。

備考　刷り悪く、字書として不適当な個所多し。

所在　慶応義塾図書館

（G5）　**六書肆・河内屋喜兵衛版（イ）**

表紙　黄色地紙に紗綾形模様空押し。

題簽　G3イ本に同じ。刷り悪し。

首巻前見返し・目次　G3本に同じ。刷り悪し。

刊記　終巻終丁ウにG3本と同じ嘉永七年六書肆のものがあり（刷り極めて悪し）、後見返し匡郭内に

京都三条通御幸町　吉野屋　仁兵衛
江戸日本橋通南壹丁目　須原屋　茂兵衛
同　通二丁目　山城屋　佐兵衛
發行　同　同　所　須原屋　新兵衛
同　芝神明前　岡田屋　嘉　七
同　同　所　和泉屋　吉兵衛
同　兩國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同　下谷池之端仲町　岡村屋　庄　助
尾州名古屋本町通　永樂屋　東四郎
書肆　同　同　所　萬　屋　東　平
同　同　所　菱　屋　藤兵衛
同　同　所　菱　屋　平兵衛
大阪心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛板

と十三名の発行書肆を列記する。すなわち六書肆版後印の河内屋喜兵衛板である。河内屋喜兵衛とは六書肆の中の一番最後にある柳原喜兵衛のことである。

備考　刷り甚だ悪く、字書としての用をなさない。

所在　内閣文庫（外務省旧蔵）

（G6）　**六書肆・河内屋喜兵衛版（ロ）**

表紙　鶯緑色地紙に紗綾形空押し模様。

首巻前見返し・目次　G5本に同じ。

刊記　G5本と同じように、終巻終丁ウに嘉永七年六書肆のものがあり、後見返し匡郭内に、京都吉野屋仁兵衛～大阪河内

屋喜兵衛までの十三軒の発行書肆を連記する。その十三名はG5本と全く同じであるが、次の点で小異がある。すなわちG5本の当該部分の匡郭の大きさが、竪十八・七弱、横十三・六五糎であるのに対して、本書のそれは竪約十三・六五糎（横は虫喰い・皺等のため計測不能）と、ずっと小型になっていること、「発行書肆」の「発」の字が、G5本では「發」となっているのに対し、本書では「發」の字を採用していること、G5本で「江戸」とあった須原屋茂兵衛の所在地名表記が、本書では「東京」となっていること等である。同じ河内屋喜兵衛板であっても、本書の方が後刷りであり、明治初期の発賣本であろうと思われる。

備考　刷り甚だ悪く、文久後刷り本（H）よりさらに劣る。

所在　天理図書館（大村藩旧蔵）

（G7）　六書肆・小島屋伊兵衛版（イ）

表紙　黄色地紙に紗綾形・雲形・圏龍紋空押し、又は縹色地紙に紗綾形・雲形空押し模様。

題簽　G3イ本に同じ。刷り非常に悪し。

首巻前見返し・目次　G3本に同じ。刷り相当悪し。

刊記　終巻終丁ウにG3本と同じ、嘉永七年大阪六書肆名連記のものあり、後見返しに、次に示す如く、須原屋茂兵衛～小島屋伊兵衛に至る八名の三都板元書店名を記す。

和漢書籍精選発兌	三都板元書店	江戸日本橋通壹丁目	須原屋　茂兵衛
		同　貳丁目	山城屋　佐兵衛
		同　芝神明前	岡田屋　嘉　七
		同　京橋弥左ヱ門丁	大島屋傳右衛門
		京寺町松原上ル	菊　屋七郎兵衛
		同　五条上ル	山城屋　佐兵衛
		大坂心齋橋南ヱ壹丁目	大野木　寶文堂
		同　心齋橋通南久宝寺町	小島屋　伊兵衛

備考　刷り甚だ悪く、G5本より劣る。

所在　金沢大学図書館

（G8）　六書肆・小島屋伊兵衛版（ロ）

表紙　濃黒渋茶色地紙に雷菱・唐草模様空押し、又は紫青色地紙に紗綾形・雲形・圏龍紋空押し。

題簽　G3イ・G7本に同じ。刷り悪し。

首巻前見返し　子持ち枠付、竪に子持ち線で三ツに割ってあるが、嘉永版に普通に見られるものとは異なる。すなわち中

央やゝ幅広の欄に「増續會玉篇大全」と書名を出し、右欄に「毛利貞齋先生著」の編者名と、「千里必窮／不許翻刻」の篆刻印模刻、左の欄に「攝都書肆　五書堂合刻」の文字を記す。刷り悪し。

目次　G3・G7本に同じ。

刊記　G7本に同じ。

備考　刷り甚だ悪し。首巻前見返しにいう摂都の五書堂とは誰を指すか未詳。あるいは大阪六書肆のうち、松村九兵衛・同清助を同系と見ての五書堂であろうか。

（G9）　六書肆・伊丹屋善兵衛版

半紙本十一冊（首巻欠）

表紙　黄色地紙に紗綾形模様空押し。

題簽　G3イ本と同じ。刷り甚だ悪し。

首巻前見返し　首巻を欠くため未詳。

目次　G3本に同じ。

刊記　終巻終丁ウにG3本と同じ嘉永七年大阪六書肆のものあり、後見返し匡郭内に

江戸日本橋通壹丁目　須原屋　茂兵衛
同　浅草茅町二丁目　須原屋　伊八
同　日本橋通二丁目　山城屋　佐兵衛
同　両國横山町三丁目　和泉屋金右衛門
同　芝神明前　岡田屋　嘉七
京都三条通升屋町　出雲寺　文治郎
肥前佐賀白山町　紙屋　惣右衛門
大坂南久寶寺町　榎並屋　小兵衛
同心齋橋通備後町　近江屋　平助
同心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋　善兵衛

發行書林

と十名の発行書林を掲げる。ともに刷りが悪い。

備考　刷りはG7本と同程度。

（H）　江戸大阪九書肆発賣本　文久元年版

半紙本十二冊

表紙　黒渋茶色地紙に紗綾形・唐草模様空押し。

題簽　嘉永版に同じ。刷り悪し。

首巻前見返し・目次　嘉永版に同じ。

刊記　終巻終丁ウにG3本と同じ嘉永七歳甲寅初春吉日　大阪書

肆　山内五良兵衛～柳原喜兵衛六名のものがあり、後見返し匡郭内に

文久元辛酉年細精改刻

江阪　須原屋　茂兵衛
山城屋　佐兵衛
岡田屋　嘉　七

書肆　河内屋　喜兵衛
炭　屋五郎兵衛
豊田屋卯左衛門
象牙屋治郎兵衛

發兌　敦賀屋　彦　七
秋田屋　市兵衛

と記す。すなわち嘉永七年（一八五四）六書肆版の後印本の文久元年（一八六一）発賣本である。「江阪書肆」とあって個々の書賈の所在地を記していないが、この場合、はじめの須原屋・山城屋・岡田屋の三軒が江戸の書肆であり河内屋以下の六軒が大阪の書肆である。

備考　「文久元辛酉年細精改刻」として改刻本の如く装っているが、要するに嘉永版六書肆本の後印本の一種にしか過ぎない。刷り悪し。

所在　天理図書館

明治五年版

（I 1 イ）　十二冊通行本

半紙本十二冊　大本もあり。

表紙　黒渋茶色地紙又は縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。縹色又は藍青色地紙に渋引き雷菱・唐草模様空押しのものや、暗小豆色地紙に紗綾形空押し模様のものもある。

題簽　子持ち枠付、白紙。

（正）　短冊形紙、表紙左肩に貼付。上部を界線で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と三行に分けて角書を出し、下方に「増續大廣益會玉篇大全」の題簽題、その真下に小字で「子」～「亥」までの十二支による冊序表記、その左横に「首巻」、「自一畫至二畫」～「自十畫至十七畫」の収載部首画数表示がある。

（脇）　矩形紙、正題簽の右脇、上方に寄せて貼付。上部を界線で区切り、首巻は「首巻總目」、他は「一二畫」～「自十畫至十七畫」までの各冊収録部首の画数を右横

書きに記し、下方を竪十行三段（首巻は十行一段）に分って、部首およびその始まりの丁数（首巻は「凡例」～「檢字」に至る内容標目のみ）を記す。丁付は「員」で示されている。この点がこれまでのものと異なる点である。

首巻前見返し　扉オの位置にあるものもあり。子持ち枠付。上方欄外に「明治五壬申六刻」と右横書きに出す。枠内は複線で中央の欄が幅広くなるように竪に三ツに割り、中央に「増續會玉篇大全」と太く大きく書名を出し、右欄上に寄せて「毛利貞齋先生著」と編者名を記し、左の欄に「浪華書肆合書堂藏梓」と大阪の書肆連の合版である旨を刻す。

目次　巻一以下各冊前見返し又は扉オの位置にあり。様式は安永版以下のものと同じ。丁付は同じく「葉」。

刊記　終巻六十一オは享保版・安永版・天保版・嘉永版に同じ。すなわち三行目に「右至十七畫大尾」とし、一行分置いて左に「此書首尾校正毛利(ママ)香之丞筆著」と記し、四行分置いて左最終行に「増續大廣益會玉篇大全巻十　大尾」と刻す。六十一ウは四周単辺の匡郭内を罫線で竪六行に分け、

元禄五壬申年御免刻成
享保二十乙卯再刻
安永九庚子三刻
天保(ママ)六乙丑(ママ)四刻
嘉永七甲寅五刻
明治三庚午八月六刻官許

とその板行経過を記す。さらに次に三周双辺の匡郭を有する一丁分を付加し、次の如く記す。

明治五年壬申夏四月六刻成

須原屋　茂兵衛	三　府
山城屋　佐兵衛	菱　屋　孫兵衛
岡田屋　嘉　七	山内屋　五良助
	象牙屋治郎兵衛
	豊田屋卯左衛門
	秋田屋　市兵衛
	敦賀屋　彦　七

發行

小島屋　伊兵衛
伊丹屋　善兵衛
河内屋　喜兵衛
河内屋　太　助
河内屋　吉兵衛

書肆

河内屋　眞　七
河内屋　勘　助
近江屋　平　助
敦賀屋　九兵衛

右の十八名の三府発行書肆は、最初の三名が東京、次の菱屋孫兵衛のみが京都、そして山内屋五良助以下十四名が大阪の書肆である。原本で菱屋の両脇が各々空いているのは、その三府の境界を示すためであり、その個所にあった書肆名を削ったりした跡では無いであろう。

備考

本書は巻五の冠解の出し方等から考えて、嘉永七年版に基づいての翻刻であろう。次の所在の項の旧蔵者名から見て、明治前期に於て、本書が実用的な単字字書として、官廨でも利用されたことを知ることができる。「享保以後大阪出版書籍目録」によると、板元は敦賀屋九兵衛外十一人、出願は明治三年八月八日、同年十月九日に許可となっている。なお本書には、首巻前見返しや終巻終丁後見返し等に「大阪書林」と横に出し、界線を置いて下に「心齋橋通／博労町南へ入／河内屋勘助／製本発兌記」と四行に刻した矩形朱印の捺してある、河内屋勘助発賣本もある。

所在

書陵部（侍医寮旧蔵）　内閣文庫（六部　(1)十一冊＜巻三欠＞　(2)外務省旧蔵　(3)太政官記録・履歴課旧蔵　(4)太政官記録・財務課旧蔵　(5)太政官記録編輯課旧蔵　(6)合九冊）　高野山大学図書館（二部）　天理図書館（河内屋勘助発賣本　巻四下欠　十一冊）　東京教育大学図書館　神宮文庫（二部）

（I 1 ロ）　薄葉刷本

半紙本　三冊

表紙　香色布貼り。

首巻前見返し　I 1 イ（十二冊本）に同じ。但し料紙に桃色染紙と黄色染紙のものがあり、それを薄紙でくるんであるのが原装。黄染紙の方が刷りが良いようである。

目次　巻一以下各巻扉オ若しくはウの位置にあり。

刊記　I1イ本に全く同じ。

分巻　首巻前見返しが黄染紙のものは、(上冊)首巻・巻一〈一二画〉～巻三〈三画下〉　(中冊)巻四〈四画〉上～巻六〈六画〉上　(下冊)巻六〈六画〉下～巻十〈自十画至十七画〉首巻前見返しが桃色染紙のものは、上冊と中冊の分巻状況が異なる。すなわち、(上冊)首巻・巻一～巻四上　(中冊)巻四下～巻六上となっている。

備考　I1イ本と同版。薄葉刷にした為、十二冊本で約十四・五糎あった全冊の厚みが、本書では約五糎、大略三分の一につゞまっている。本書には、桃色染紙の首巻前見返し右欄著作者名の下方等に、「大阪本町通／心齋橋東江入／河内屋真七／製本發兌記」と刻した矩形朱印の捺してある、河内屋真七発賣本もある。

所在　内閣文庫(三部　(1)首巻前見返しが黄紙　法制局旧蔵　(2)同桃染紙　(3)同　河内屋真七発賣本)　書陵部(合一冊　首巻前見返し改装白紙)

(I2)　中川勘助版

表紙　縹色布目地紙に紗綾形模様空押し。

題簽・首巻前見返し　I1イ本に同じ。

刊記　終巻六十一オ・ウおよび次の一丁はI1イ本に同じ。その後さらにまた一丁半を付加し、左の如く、四周単辺の匡郭内に計三十六名の「各地弘通書肆」を掲げる。

各地

東京日本橋通一丁目　北畠　茂兵衛
同　二丁目　稲田　佐兵衛
同　三丁目　長野　龜七
同　通油丁　水野　慶次郎
西京花屋丁油小路東　永田　調兵衛
伏見大阪丁　前田　半兵衛
大和奈良東向北丁　高橋　平三
泉州堺神明丁　鈴木　久三郎
伊勢山田一志町　加藤　長平
名古屋京丁　美濃屋代　助
同　七軒丁　永樂屋吉三郎
江州彦根　小川　九平
美濃大垣　岡安　慶助
同岐阜觀屋丁　水谷　善七
越前福井　帶屋　喜八

加州大聖寺　深田屋伊三郎
越後柏崎新助甲　高桑屋小平
播州　姫路　灰屋　輔二
備後　福山　笹屋　喜兵衛
安藝廣嶋堀川町　荒木　豊次郎
周防　山口　山城屋　臣吉
但馬　豊岡　桶屋　甚次郎
出雲松江天神町　川岡　清助
紀州　若山　野田　大二郎
東京芝神明前　山中　市兵衛
同　大傳馬甲三丁目　東生　龜次郎
西京三條通御幸甲　大谷　仁兵衛
同　二條通柳馬場　若林　喜助
名古屋本甲通八丁目　片野　東四郎
同　四甲目　矢野　藤兵衛
加州金沢上堤甲　中村　喜平
同　保江甲　近田　太平
石見濱田戎甲　安達　幾太郎
豊前　中津　幸子屋壽平
泉州堺山口通熊野甲　北村　佐兵衛
大坂心齋橋通博労甲　中川　勘助版

すなわちI1イ本後印の中川勘助版である。

備考　刷りはやゝ劣り、字書としての用を果たし得ぬ程版面の磨滅している個所がある。

所在　慶応義塾大学国文学研究室

明治八年版

(J)　如不及齋佐竹義脩蔵版本

半紙本十二冊

表紙　縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽　正のみあり、脇は無い。子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。E1イ本と同じ様式。

首巻前見返し　単枠内を竪に三ツ割にし、中央は上部に界線を置いて「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と角書、その下に「校正增續大廣益會玉篇大全」と書名を出す。右の欄は上方に「毛利貞齋編述／秋田藩士校正」と二行に記し、左の欄は「東京　如不及齋藏版(朱印)」とある。これにより本書がE本・F本の流れを汲むものであることを知ることが

できる。

首巻扉　オモテ匡郭内に

明治八年乙亥十月廿九日版權免許

校正増續大廣益會玉篇大全十二冊

東京第六大區八小區

中郷瓦町壹番地居住

佐竹義脩藏版

と記す。ウラは匡郭内下方右に寄せて「如不及／齋減書／版之印」と篆刻した大型正方印を模したものがある。

目次　扉オの位置にあり。F1本のものを流用。首巻にもある。刷り悪し。

刊記　E1本・F1本と同じ。すなわち終巻終丁オ本文欄五～八行、同ウ一～八行目の部分が黒塗り状になっている。

備考　本書は、秋田藩明徳館蔵版本と同版の無刊記本「校正増續大廣益會玉篇大全」（F1本）の版木を流用しつゝ、一部の丁をそれに基づいて改刻し、題簽と首巻前見返し・首巻扉を新たに付して、発賣したものである。したがって各巻、刷りの比較的良い丁と相当に悪い丁とが、入り交じっている。例えば、首巻で言うと、前見返しと扉が新刻、目次がF1本のもの、本文一オ～十八ウがF1本のかぶせ彫り、十九オ～二十二ウはF1本のもので刷り悪し、二十三オ～二十四（終丁）オがF1本のかぶせ彫り、という具合になっている。他の巻では、もっと目まぐるしく入りまじっている場合がある。いずれにしても、やゝ安易な重刊態度である。

本書の蔵版主佐竹義脩（ヨシナオ）は、佐竹家三十二代（秋田十二代）義堯（ヨシタカ）の実弟義諶（ヨシヅマ）の子で、幼名亀丸、のち次郎と称し、慶応元年（一八六五）五月以降義脩と名乗った（「新編佐竹氏系図」・〔佐竹次郎御名乗〕）。そして慶応元年四月義堯の長女雅子（モトコ）と婚し、明治五年（一八七二）一旦義堯の後を継ぐも、明治十四年（一八八一）廃嫡となったと言う。したがって秋田藩とは深いつながりを有し、その彼が、明徳館本と首巻扉を除いて同版の「校正増續大廣益會玉篇大全」を主体として、重刻・再版を行なったのも、不思議ではない。義脩は明治十一年（一八七八）にも、本書の再発賣を企てゝいるのである。現在、秋田県立秋田図書館に、このあたりの出版経過を示す〔玉篇板権願〕の写しが所蔵され

ているので、次にその全文を紹介することゝする。竪二十二、横七・五五糎の美濃紙封筒入り、仮綴二丁。

三百三号

板權願

一、校正増續大廣益會玉篇大全　十二冊大

右者毛利貞齋著述出板、其中誤謬ヲ校訂シ重刻出板、天保九年ヨリ所持罷在候處、文字漫漶ニ付、明治二巳年中再ヒ重刻出願、同年七月廿日重刻免許、既ニ出板有之、一切條例ニ背キ候儀無之候間、板權免許奉願候也

東京府華族

明治八年
亥九月十九日　従四位佐竹義脩㊞（黒）

明治八年九月
二十一年五ケ月
東京府下第六大區八小區
中之郷瓦町壹番地居住

内務卿大久保利通殿

前書之通相違無之者也

明治八年
十月九日　東京府知事大久保一翁㊞（朱）

印割（朱）（以下朱書）

書面願之趣聞届候事

但免許状ハ追テ可相渡候事

明治八年十月廿九日　内務卿大久保利通㊞

封筒のオモテには

出版定例御布告ニ付、御藏版玉篇版権願、明治八年十月九日東京府庶務課江進達、同年十月廿九日内務卿ヨリ願済御指令書写入、且同年十一月廿七日東京府庶務課ヨリ板(カ)権免許書御渡相成、同月廿九日免許料上納

同ウラには

板権免許願済御指令本書

冨岡英之助方ニ有

同料上納請取書右同断

免許証　御納戸江御仕舞

とあり。

所在　国立国会図書館（教育博物館旧蔵）書陵部（二部　一部は学習院図書館旧蔵）

明治十年版

（K1）　浪華十三書肆版

半紙本十二冊　大本もあり。

表紙　縹色地紙又は渋引き濃縹色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽　正・脇とも明治五年版と同様式。

首巻前見返し　明治五年I1イ本とほゞ同形式。

異なる点は、上欄外の刊年記が「明治十丁丑七刻」となっている点と、右欄の「毛利貞齋先生著」の「著」の部分が「編輯」となっている点である。前見返しではなく扉オの位置にあるものもあり。

目次　明治五年I1イ本に同じ。

刊記　終巻六十一オは明治五年版にほゞ同じ。六十一ウは、四周単辺の匡郭内を罫線で竪九行に分け

元禄五壬申年御免刻成
享保廿乙卯年　再刻
安永九庚子年　三刻
天保六（ヶ）乙丑（ヶ）年　四刻
嘉永七甲寅年　五刻
明治三庚午年八月六刻官許
同　八年十一月十七日版權免許
同　十年五月三日再版御届
同　十年七月　七刻出版

と記す。天保五年とあるべき所を六年としたり、またその六年の干支「乙未」を「乙丑」とする誤りは、明治五年版をそのまゝ受け継いでいる。そして次に、明治五年版と同じく三周双辺の匡郭を有する一丁分を付加し、次の如く編輯人名および十三名の出版人を列記する。

編輯人　住所不詳　故人　毛利　貞　齋

出版人　第一大區二小區糸屋町一丁目二十番地　大坂府平民　山内　五郎助
同　第一大區六小區博労町二丁目五十四番地　同上　和田治郎兵衛
同　第二大區五小區長堀橋筋上壹丁目八番地　同上　豊田宇左衛門
同　第二大區六小區心齊橋筋一丁目七番地　同上　大野木市兵衛
同　第一大區七小區南久宝寺町四丁目九番地　同上　兒島　伊兵衛
同　第一大區七小區南久宝寺町四丁目三十五番地　同上　前川　善兵衛
同　第一大區七小區北久太郎町四丁目十四番地　同上　柳原　喜兵衛

同	第一大區七小區唐物町四丁目十番地	同上	森本　太助
同	第一大區七小區唐物町四丁目三十四番地	同上	淺井　吉兵衛
同	第一大區八小區本町四丁目十二番地	同上	岡島　眞七
同	第一大區七小區博労町四丁目十二番地	同上	中川　勘助
同	第一大區八小區備後町四丁目三十番地	同上	吉岡　平助
同	第二大區六小區心齊橋筋一丁目四十六番地	同上	松村　九兵衛

備考　本書は明治五年版に基づいての覆刻である。但し巻七の尾題が異なっている。すなわち元禄版以来ずっと巻七の尾題は、「七盡大成（三行置いて左に）増續大廣益會玉篇大全七盡終」という風にあったのであるが、その「七盡」の「盡」の部分を、通り易く「盡」と改めてある。

なお本書には、「浪華書賈」と右横書きに出し、界線を置いて下に「堺筋金田街／和田窓旭堂／象牙屋治郎兵衛／藏版發兌」と記した、子持ち枠付矩形朱印の捺してある、象牙屋和田治郎兵衛発賣本もある。

所在　国立国会図書館（二部　一は巻七欠十一冊本）

（K2）　中川勘助版

表紙　濃黒渋色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽・首巻前見返し等　K1本に同じ。但し刷りは劣る。

刊記　終巻終丁と次の一丁はK1本に同じ。本書ではその後、後表紙見返し匡郭内に、次の如く十三名の諸国発行書肆名をあげる。

諸	東京日本橋通一丁目	北畠茂兵衛
同	通二丁目	稲田佐兵衛
同	芝太神前	山中市兵衛
國	西京三條通堺町	出雲寺文次郎
	名古屋本甲七丁目	片野東四郎
發	同　四丁目	矢田藤兵衛
	加州金澤保江甲	近田太平
行	同　上堤甲	中村喜平
	播州姫路俵甲	伊藤和七郎
書	防州山口	宮川臣吉
	雲州松江魚甲	大芦利七
肆	豊前中津古博多町	梅津壽平
	大阪心齋橋通博勞町四丁目	中川勘助

備考　刷り悪く、字書として役立て得ぬ個所がある。
所在　金沢市立図書館藤本文庫

（K3）　前川善兵衛発賣本

表紙　K2本に同じ。
題簽・首巻前見返し・目次　K1本に同じ。刷り悪し。
刊記　K1本に同じ。刷り悪し。
備考　終巻後見返し匡郭内に、藤沢南岳閲・寺倉梅太郎撰評の「今古卅六名家文抄」全三冊の解説付き広告があり、末に「大阪心齊橋筋南久寶寺町北／出版人　前川善兵衛」とある。「今古卅六名家文抄」は明治十二年一月の刊であるから、本書もおそらくその前後の発賣にかゝるものであろう。刷り悪く字書として不適当な個所あり。

明治十一年版

（L）　佐竹義脩分版本

半紙本十二冊
表紙　濃黒渋地紙に雷菱・唐草模様空押し。
題簽　明治五年版・十年版と同型式。
首巻前見返し　子持ち枠内を複線で中央が他に比べて幅広くなるように竪に三つに割り、中央に太く大きく「増續會玉篇大全」と書名を出し、右の欄上に寄せて「毛利貞齋編輯」、左の欄下方に「佐竹氏發兌」と記す。
目次　F1本のものを流用している明治八年版に同じ。
刊記　終巻終丁オ本文欄五～八行目、同ウ一～八行目が黒塗り状になっている。これは秋田藩明徳館本・F1本・明治八年本と同じである。次に一丁分を新たに付加して、子持ち枠内に次の如く記す。

明治八年十一月十七日版權免許
同十一年　七　月　九　日分版御届

編輯人	住所不詳	故人　毛利貞齋
原版主	第一大區二小區糸屋町一丁目二十番地	大阪府平民　山内五郎助
同	第一大區六小區博勞町二丁目五十四番地	同上　和田治郎兵衛
同	第二大區五小區長堀橋筋上一丁目八番地	同上　豐田宇左衛門
同	第二大區六小區心齋橋筋一丁目七番地	同上　大野木市兵衛

同	第一大區七小區南久宝寺町四丁目九番地	同上 兒島伊兵衛
同	第一大區七小區南久宝寺町四丁目三十五番地	同上 前川善兵衛
同	第一大區七小區北久太郎町四丁目十四番地	同上 柳原喜兵衛
同	第一大區七小區唐物町四丁目十番地	同上 森本太助
同	第一大區七小區唐物町四丁目三十四番地	同上 浅井吉兵衛
同	第一大區八小區本町四丁目十二番地	同上 岡嶋眞七
同	第一大區七小區博勞町四丁目十二番地	同上 中川勘助
同	第二大區八小區備後町四丁目三十番地	同上 吉岡平助
同	第二大區六小區心齋橋筋一丁目四十六番地	同上 松村九兵衛

東京府華族

分版受主　從四位　佐竹義脩

第六大區八小區中ノ郷瓦町壹番地

發賣

第五大區八小區浅艸北東中町五番地　東京府平民　浅倉久兵衛

第一大區七小區南傳馬町一丁目十二番地　同　吉川半七

このうち原版主十三名は、明治十年版の出版人と掲出順も全く同じである。たゞ吉岡平助の住所が、かれは「第一大區」とありこれは「第二大區」とある点が異なっている。分版受主佐竹義脩については明治八年版備考を参照のこと。

備考　本書は明治八年版の再刷本である。題簽と首巻前見返し、それに奥付を新しくしたゞけで、他はもとのまゝである。したがって刷りが相当に悪い。

所在　国立国会図書館　秋田県立秋田図書館

明治十三年版

(M1)　九書肆本

半紙本　十二冊

山田忠雄氏「漢和辞典の成立」付表(昭和34・12)に「大阪松村九兵衛→竹中清助計9名」として紹介されているもの。未見。

(M2)　十三書肆本(イ)

半紙本　十二冊　鉛版

表紙　濃黒渋色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽　正は明治十年版と同じ様式。脇は飾り枠が付されている点と、丁付がこれ迄の「葉」ではなく「員」で示されていることが、異なる。

首巻前見返し　単枠内を複線で中央部分が幅広になるように竪に三ッに割り、中央に「増續大廣益會玉篇大全」と書名を出し右欄上方に「毛利貞齋編輯」、左の欄に「明治八年十一月十七日版權免許」と記す。

内題　大体に於いて前版を継承しているが、次にあげる個所が異なる。

（巻六下）　増續大廣益會玉篇大全巻第六下六畫（ママ）」　（巻八）

續（ママ）増大廣益會玉篇大全巻第八八畫」

尾題　（巻一）十七頁〈九オ〉にある「已上一畫部終」の表示が、九行目から十行目に移っている。これは前の字の註が字数を揃える都合上一字分九行目にずれこんで来ているためである。（巻四上）八行目にある画数表示「四畫上㬎」の「㬎」の字が「暎」になっている。（巻六上、巻九、巻十）巻分けに「巻第十」の如く「第」の字を入れる。また巻十の尾題終行の前に界線を置く。（巻六下、巻七、巻八）これまで「巻之六下」「七畫終」「巻之八」とあった巻分けを、各々、「巻第六下」「巻第七終」「巻八」とする。他は明治十年版等と同じ。

刊記　終巻終丁オ（百二十一頁）はこれまでと同じ。ウは子持ち枠付匡郭内を界線で、始めの四行は竪二段、次は三行分竪一段に区切り

元祿五壬申年　享保廿乙卯年　再刻
安永九庚子年　三刻　天保六乙（ママ）丑年　四刻
嘉永七甲寅年　五刻　明治三年八月　六刻
明治十年七月　七刻
明治八年十一月十七日版權免許
同　十三年八月廿三日再版御届
同　十三年十二月　八刻出版

と出版経緯を記す。次に単枠付の奥付を一丁半分付加し、編輯人の名と十三名の出版人、七名の発賣人を掲げる。

編輯人　住所不詳　故人　毛利貞齋
出版人　東區糸屋町一丁目二十番地　大坂府平民　山内五郎助
同　東區博勞町二丁目五十四番地　同上　和田治郎兵衛

同	南區長堀橋筋上壹丁目八番地	同上 豊田宇左衛門
同	南區心齊橋筋壹丁目七番地	同上 大野木市兵衛
同	東區南久寶寺町四丁目九番地	同上 兒島伊兵衛
同	東區南久寶寺町四丁目三十五番地	同上 前川善兵衛
同	東區北久太郎町四丁目十四番地	同上 柳原喜兵衛
同	東區唐物町四丁目十番地	同上 森本太助
同	東區唐物町四丁目三十四番地	同上 淺井吉兵衛
同	東區本町四丁目十二番地	同上 岡島眞七
同	東區博勞町四丁目十二番地	同上 中川勘助
同	東區備後町四丁目三十番地	同上 吉岡平助
同	南區心齊橋筋壹丁目四十六番地	同上 松村九兵衛
發賣人	南區心齊橋筋壹丁目二番地	和田庄藏
同	東區北久寶寺町四丁目	前川宗七
同	同區同町	前川源七郎
同	同區同町	中尾新助
同	東區南本町四丁目	金尾爲七
同	南區心齊橋筋壹丁目	森本專助
同	南區末吉橋通三丁目	北村宋助

十三名の出版人は、大区小区制が無くなって住居表示こそ違え、明治十年版のそれと掲出順も含めて同じである。なお、出版人・発賣人名の下方に、各々の屋号や姓名の朱印（検印）を捺してあるのが普通である。

柱刻

各頁の匡郭外に、首巻は

三　凡例　子

一十　首巻　子

等と出し、他は

一　馬部　二畫　亥

二十二　骨部　十五之十九畫　高部　三畫　至十畫　亥

等と、上部に頁数を漢数字で右横書に出し、その下脇に部首と部首内に於ける標出字の画数、さらにその下に十二支による冊順表示を記す。部首表示では、例えば終冊四十頁「魚部」とあるべきところが「鬼部」となっているが如き

間違いもある。

頁付　目次には無し。（首巻）□（ナシ）、二～四十七（巻一）一～四十、四一～四二、四十三～百三十（巻二）□（目次）（ナシ）、二～九十五（巻三）一～九十二（巻四上）一～百十一（巻四下）一～百七十二（巻五）一～百五十一（巻六上）一～百三十（巻六下）一～百十三（巻七）一～百五十八（巻八）一～七十六（巻九）一～五十四（巻十）一～百廿一＜末四頁分にはナシ＞

頁数　各冊とも目次を除き計上。（首巻）四十七頁（巻一）百三十頁（巻二）九十四頁（巻三）九十二頁（巻四上）百十一頁（巻四下）百七十二頁（巻五）百五十一頁（巻六上）百三十頁（巻六下）百十三頁（巻七）百五十八頁（巻八）七十六頁（巻九）五十四頁＜すなわち第十一冊目は合計百三十頁＞（巻十）百二十一頁、他に奥付四頁

匡郭　四周子持ち枠付。大部分の丁はその中に本文部分の枠（有界）を組む。竪十八・九五、横十三・四九糎。本文部分は竪十四・八九、界幅一・三五糎。

目次　首巻（ナシ）、巻三上（第一頁）をのぞき扉オの如くにあり。前見返しの位置にある本もあり。様式は明治十年版等と同じで丁付も「葉」で示されているが、数え方は、巻一・三・四下・五・六上・七・八九・十が頁数になっており、巻二・四上・六下の三つが丁数になっている。

備考　おそらく明治十年版に依るものであろう。但し巻五の冠解の出し方の乱れは無くなり、他巻と同じ□になっている。一見活版の如く見えるが如何か。

所在　慶応義塾大学国文学研究室

（M3）　十三書肆本（ロ）

表紙　空色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽・首巻前見返し・目次等　M2本に同じ。

刊記　終巻終丁ウ、元祿五壬申年～同（明治）十三年十二月八刻出版と、その出版年次が記されている部分の字体が、M2本と異なる。その他は同じ。

備考　刷りはM2本より僅かに劣るか。

（M4）　十三書肆本（ハ）

表紙　青色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽　様式は同じであるが、正題簽がM2本と異なりM2本を真

似て新刻。

首巻前見返し・目次等　M2本に同じ。

刊記　M3本に同じ。

所在　慶応義塾大学国文学研究室

（M5）　十三書肆本（二）

表紙　空色地紙に渋引き、雷菱・唐草模様空押し。

題簽　正はM4本と同じ。脇は丁付「員」が丁数で無く頁数を示している点でこれ迄のものと異なる。

首巻前見返し　M2本に同じ。黄染紙のものもあり。

目次　M本4までは巻二・四上・六下の丁付が丁数を示していたのに対し、元の丁数の数字部分も生かしながら象嵌により頁数に直してある。

刊記　M3本と同じ。

備考　これまでは、本文が頁数で表示されているのに、脇題簽の部首が丁数で示されていたり、目次が巻により頁数表記のものと丁数表記のものと入りまじっていたりして、不統一の感をまぬがれなかったが、本書よりすべて頁数に統一されたわけである。

（M6）　十三書肆補刻本

表紙　群青色地紙に雷菱・唐草模様空押し。

題簽　M5本に同じ。

首巻前見返し　桃紅色染紙。子持ち枠付。上欄外に「明治十三年八刻」と右横書に出し、枠内を複線で中央の欄が幅広くなるように三ツ割。中央に「増續會玉篇大全」と太く大きく書名を出し、右の欄に「毛利貞齋先生編輯」、左の欄に「浪華書肆合書堂藏梓」と記す。明治十年版に基づく新刻。

目次　M5本に同じ。

刊記　終巻終丁オ（百二十一頁）以下すべて新組み。終丁ウはM2～M5本と同じ様式なれど、「元祿五壬申年　初刻」と「初刻」の字が入り、「天保六乙未年　四刻」と天保六年の干支が正しく改められている点で、異なる。末に付加された子持ち枠付の一丁分には、編輯人の名と、十三名の出版人、五名の発賣人を列記してあるが、M2～M5本と比べ、出版人のうち三名が代っており、発賣人は七名から五名に減り、共通するのは金尾と森本の二名になっている。

編輯人　住所不詳　故人　毛利貞齋

出版人	東區糸屋町一丁目二十番地	大阪府平民	山内五郎助
同	東區北久寶寺町四丁目	同上	前川源七郎
同	南區長堀橋筋上一丁目八番地	同上	豊田宇左衛門
同	東區本町四丁目	同上	中尾新助
同	東區南久寶寺町四丁目九番地	同上	兒島伊兵衛
同	東區南久寶寺町四丁目三十五番地	同上	前川善兵衛
同	東區北久太郎町四丁目十四番地	同上	柳原喜兵衛
同	東區唐物町四丁目十番地	同上	森本太助
同	東區北久太郎町四丁目八番地	同上	辻本信太郎
同	東區本町四丁目十二番地	同上	岡島眞七
同	東區博勞町四丁目十二番地	同上	中川勘助
同	東區備後町四丁目三十番地	同上	吉岡平助
同	南區心齊橋筋一丁目四十六番地	同上	松村九兵衛
發賣人	東區唐物町四丁目		竹中清助
同	同　博勞町四丁目		野村長兵衛
同	東區南本町四丁目		金尾爲七
同	南區心齊橋筋一丁目		森本專助
同	同　安土町四丁目		華井卯助

備考　巻五終丁オ(百五十一頁)、巻六下終丁オ(百十三頁)は、M2～M5本と様式同じなれど、全面新しく組みかえている。明治十五年二月辻本信太郎刊山崎昇編「鼇頭韻學圓機活法」の末に「尚書堂辻本信太郎新刊書目」の付されているものがあるが、それに「洛濱毛利貞齋先生著述　全十二冊鉛版　代價金三圓　○大廣益會玉篇大全」とあるのは、本書のことであろう。

所在　東京大学図書館鷗外文庫(小倉京町壹丁目　書肆　三浦春日堂の貼り札あり。殆ど使用の跡は認められない。)

明治十六年版

(N1)十二書肆本(イ)

小本銅版薄葉刷六冊　濃紺布貼帙入り

表紙　水色無地紙　竪十三・九三、横九・四一糎。

題簽

(帙)単枠付短冊形藁色布、左肩に貼付。「増續大廣益會玉篇　大全　完」

（正）子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。上方を二重線で区切り「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」と角書。下方に「増續大廣益會玉篇大全」の書名、その右下に「子丑」〜「戌亥」に至る冊順表記、左下に「首巻一二畫」「三畫上下」「四畫上下」「五畫六畫上」「六畫下七畫」「自八畫至十七畫」とその収録部首の画数を記す。

（脇）蔓草模様飾り枠付矩形紙。「首巻總目子」「一二畫丑」などと画数表示等は竪一段に記し、各々の部首およびその始まりの丁数を「葉」で四段ないし五段に示す。

第一冊扉

（オ）赤刷の飾枠付。中央部分が多少幅広くなるように、赤の界線で竪に三ツに割り、中央に「増續大廣益會玉編大全」と書名を出し、右欄上方に寄せて「日本毛利貞齋篇輯」左欄中央に「大坂同盟書堂梓（同盟朱印）」と、篆書体黒字で記す。

（ウ）同じく赤刷飾り枠付。その内側中央に更に赤刷飾り枠を作って、その外側上方に「大日本」、下方に「大阪銅鐫」と右横書に出し、内側の飾り枠内に「明治八年十一月十七日／版權免許明治十六／年三月第九版發行」と黒字篆書体で記す。

尾題

（巻六下）六畫下至於此畢」（四行分置いて次に）増續大廣益會玉篇大全巻之六下終」（巻八）八畫大成」（一行置いて次に）増續大廣益會玉篇大全巻之八終」（巻九）増續大廣益會玉篇大全巻九終」（次に来る「九畫大成」の四字が無い）（巻十）（51オ3行目）已上十二畫終已下十三畫始」他は明治五年版等に同じ。

刊記

巻十終丁（61）オは明治五年版、十年版、十三年版等に同じ。同ウは

元祿五壬申年　享保廿乙卯年　再刻
安永九庚子年　三刻　天保六乙丑年　四刻
嘉永七甲寅年　五刻　明治三年八月　六刻
明治十年七月　七刻　明治十三年八月　八刻
明治八年十一月十七日　版權免許
同　十六年三月廿六日別製本御届

とその出版経緯を記す。この様式は明治十三年版M2〜M5本と似る。左下余白に「定價貳圓五拾錢」の朱印を捺してある場合が多い。次に奥付二丁分（但し二ウは空白）を付し、編輯人毛利貞齋の名と、十二名の出版人、七名の発

賣人を掲げる。

編輯人	住所不詳	故人	毛利貞齋
出版人	東區糸屋甲一丁目十四番地	大坂府平民	山内五郎助
同	南區心齊橋筋壱丁目四十三番地	同上	松村九兵衛
同	南區長堀橋筋上壹丁目八番地	同上	豊田宇左衛門
同	南區心齊橋筋壱丁目七番地	同上	大野木市兵衛
同	東區南久寶寺町四丁目四十九番地	同上	兒島伊兵衛
同	東區南久寶寺町四丁目八番地	同上	前川善兵衛
同	東區北久太郎町四丁目十五番地	同上	柳原喜兵衛
同	東區唐物町四丁目三十八番地	同上	森本太助
同	東區唐物町四丁目十番地	同上	淺井吉兵衛
同	東區本町四丁目五十九番地	同上	岡島眞七
同	東區博勞町四丁目四十三番地	同上	中川勘助
同	東區備後町四丁目三十七番地	同上	吉岡平助
發賣人	南區心齊橋筋壱丁目二番地		和田庄藏
同	東區北久寶寺町四丁目三十八番地		前川宗七
同	同區同町三十九番地		前川源七郎
同	東區本町四丁目五十六番地		中尾新助
同	東區南本町四丁目十番地		金尾爲七
同	南區心齊橋筋壱丁目一番地		森本專助
同			北村宋助

目次

首巻（ナシ）・巻二（一オ）を除き各巻扉オの位置にあり。三重枠付。様式は明治五年、十年、十三年版等通行のものに似る。但し、巻二をのぞき各目次右下欄外に小さい枠組を作り、「申之部」（巻六下）、「酉之部」（巻七）等と、原本の冊順を示す。丁数は「葉」で示されているが、巻二のみ「員」とある。また部首および丁数は竪十行三段に記されているが、巻六下は一段である。

柱刻

増續會玉篇　凡例　一　同盟書房

増續會玉篇　口　十一ノ十九　土　一ノ　三　巻三上　廿二　同盟書房

の如し。すなわち上部に柱題を出し、その下に部首と標出

字の画数を小書にし、魚尾黒をはさんで下方に巻分けと丁数、さらに界線を置いて「同盟書房」と記す形式のものが多い。

丁付　大略明治十一年版までのものに同じであるが、初めの丁の「乙」を「一」に直している巻が多い。巻二・四下・七・九をのぞき皆「一」で始まる。

匡郭　三周子持ち枠。内側に本文用枠(有界)あり。竪十一・五五、横七・三糎。本文枠は竪九・一一糎。

分巻　(第一冊)首巻・巻一　(第二冊)巻二・巻三　(第三冊)巻四上・下　(第四冊)巻五・巻六上　(第五冊)巻六下・巻七　(第六冊)巻八～巻十

備考　明治五年版を基にし、十三年版等を一部参考にしたものか。巻七の尾題の画数は二ケ所とも「七盡」になっており明治五年版に逆戻りしている。これまでの諸本に見られた巻五の冠解の標出字の上にある記号の乱れは、本書独自の形ではあるが、やはり見られる。なお第一冊凡例一オ綴目側下方に「大阪中ノ島　伊藤聽泉堂銅刻」、第六冊奥付一オ同個所に「大阪聽泉堂銅刻」と記す。

所在　国立国会図書館(二部　一は合三冊)内閣文庫

(N2)　十二書肆本(ロ)

表紙・題簽　N1本に同じ。

首巻扉　N1本のかぶせ彫りか。

刊記　次の一ケ所をのぞき他はN1本に同じ。すなわち奥付一ウ三番目にある浅井吉兵衛の代わりに「同　東區北久太郎町四丁目九番地　辻本信太郎」が入っている。同一ウにある他の五名の出版人の名前より、高さがやゝ下がっているので、こゝのみ後から入れ替えたものと考えられる。

備考　出版人が一名入れ代っているだけで、他はN1本に同じである。

(N3イ)　十五書肆・三発賣人本

小本　銅版薄葉刷　三冊

表紙　藍紺色布貼。

題簽　白絹布貼。様式はN1本に大略同じ。正は原冊順表示が「子丑寅卯」～「申酉戌亥」と各冊四つ宛になっており、収載部首の画数表示は「首巻自書(マヽ)至三書下」「自四書上至六書上」「自六書下至十七書」となっている。また脇題簽の部首・丁数表示は、五乃至七段に行なわれている。

刊記　N2本の刊記にある出版人のうち、大野木市兵衛の代わりに「東區南本町四町(マヽ)十番地　金尾爲七」が入っており、十二人目の吉岡平助の後に「同　南區心齋橋筋同上壱町目二番地　和田庄藏／同　東區北久宝寺四丁目三十九町　同上番地　前川源七郎／同　東區本町四町目五十四番地　同上　中尾新助」の三名が加わっている。この四名は、N1・N2本の七名の発賣人のうちから出版人に変わったものであり、したがって発賣人はその残り前川宗七・森本專助・北村宋助の三名となっている。新しく出版人となった四名については右に掲げた部分が、また発賣人は住所・身分等を含めたその全てが、各々新しく刻されている。

分巻　(第一冊)首巻・巻一～巻三　(第二冊)巻四上～巻六上
(第三冊)巻六下～巻十

備考　三冊本にし、表紙・題簽を変え、奥付の一部を手直ししているが、本体はN2本と同版である。

所在　無窮会図書館

(N3ロ)十五書肆・三発賣人・尚書堂本

表紙その他　N3イ本に同じ。

刊記　N3イ本に同じ。但し本文終丁と奥付との間に「尚書堂新刊藏版書目録」が三丁分挿入されている。すなわち尚書堂辻本信太郎の発賣本である。

備考　前引の明治十五年二月辻本信太郎刊　山崎昇編「鼇頭韻學圓機活法」の末に付された「尚書堂辻本信太郎新刊書目」に、

洛澁　毛利貞齊先生編　巾箱精英形／○四聲附韻冠注補闕類書字義
増續大廣益會玉篇大(マヽ)薄葉摺絹表紙帙入　定價二圓五十錢
該書ハ玉篇之魁タルハ江湖君子知了セラルヽトコロニシテ、既ニ再版第八版ニ及ビ、十万部以上ヲ印刷セリ、之レ大廣益タル所以ナリ、然シテ從來ノ書ハ大本ナルヲ以テ提携繙閲ニ便ナラス、依之巾箱精英形ニナシ、精密之銅版ニ縮刻シ、良工ヲ撰ヒタレハ、細字ニシテ鮮明ナリ、加之提携繙閲ニ極メテ便ナリ、實ニ無雙寶益之良書也

とあるは、本書もしくはN2本あたりを指すか。

(N4)　十五書肆・四発賣人本

表紙・題簽　N3本に同じ。

刊記　N3イ本の刊記にある三発賣人名の後に、もう一人「同

東區北久寶寺町三丁目甲第卅四番所有地　同上　花本安次郎」が新しく加わり、計四名になっている。この一名分のみが新刻補入であり、他はN3イ本のまゝである。

備考　首巻扉など、多少刷りが落ちて来ている。

所在　東京教育大学国語学研究室

（N5）　九書肆本

首巻扉　N1〜N4本に基づいて新刻。赤刷飾り枠の外側が子持ち枠、内側が二重枠、界線が重線になっている点と、枠ばかりではなく書名その他の記されている文字も全て赤刷になっている点が、他と異なる。

目次等　N1〜N4本に同じ。

刊記　下巻本文終丁ウにある元禄五壬申年〜同（明治）十六年三月廿六日別製本御届までの経緯は、N1本以下に同じ（刷り悪し）。奥付はこれまでのものに代えて、一丁分を新刻している。編輯人毛利貞斎の名と出版人九名を記すのみで、発賣人は居ない。

故人　毛利貞齋

編輯人　住所不詳

出版人　南區心齊橋筋一丁目四十三番地　大阪府平民　松村九兵衛

同　南區長堀橋筋上一丁目八番地　同上　豊田宇左衛門

同　東區博勞町四丁目四十三番地　同上　中川勘助

同　東區南久宝寺町四丁目三十六番邸　同上　野村長兵衛

同　東區南久宝寺町四丁目八番地　同上　前川善兵衛

同　東區南本町四丁目十番地　同上　金尾爲七

同　東區本町四丁目五十九番地　同上　岡島眞七

同　東區備後町四丁目卅七番地　同上　吉岡平助

同　東區唐物町四丁目三番屋敷　同上　竹中清助

備考　版面やゝ疲れ、刷りが落ちて、字書としての用をなし得ぬ個所もある。

所在　国立国会図書館亀田文庫（首巻扉欠）

明治三十八年版

（O）　郁文舎・文海堂本

洋装本　石版小本一冊

表紙　茶色クロス装。淡紅色、淡青色等のものもあり。竪十五・五糎。

背文字　上寄りに黒で飾り枠を捺し、その中に「増續會玉篇大全」

と金文字、そのすぐ下枠外に「東京郁文舎發行」と右横書きに金文字を捺す。下方には花紋あり、背の天地に各々金の二重線を捺す。

扉オ　深黒緑色刷り。子持ち枠付。中央がやゝ幅広くなるように界線で竪に三ツ割。中央に「增續會玉篇大全」と書名を凸版で出し、右欄上に寄せて「毛利貞齋著」、左の欄に「東京大阪郁文舎文海堂發行」と活版で組む。

内題　通行本に同じ。

尾題　明治十年版に同じ。巻七の画数は「七畫」と正しく表記されている。

刊記　終巻最終頁は通行本に同じ。次に奥付一頁分を付加し、活版で組む。単枠付。

明治三十八年九月十日九版印刷
明治三十八年九月十五日九版發行

增續會玉篇大全
定價壹圓五拾錢

著者　故毛利貞齋
東京市京橋區柳町五番地
發行兼印刷者　櫻井庄吉
大阪市南區心齋橋筋二丁目六十七番屋敷
發行者　松村九兵衛

版權免許

〔郁文舎印刷部行〕

發行所　東京市京橋區柳町五番地　郁文舎
大坂市南區心齋橋筋一丁目　松村文海堂

右の検印の個所に「郁文／舎發／行印」の正方印を捺す。

目次　各巻の前には無く、前見返しに別刷の「會玉篇大全總目」を貼付し、画数順に部首とその始まりの頁数を並べ、二十六行九段に記す。単枠付、青刷。

柱刻　各頁上方に○を置いてその下に部首とその部首内の該当画数、下方に頁数を漢数字で記す。例えば

○凡例　一
○口部　十畫—十九畫　百七十二
○戈部　三畫—十三畫　○弓部　一畫—二畫　三百

の如し。この部分は活版で組んである。校正をしっかりしなかった為か、部首や頁数がひっくり返っていたり、飛んでいたりの誤植がある。

頁付　首巻は独立。他は通し。(首巻)一～四十七　(巻一)一～百三十　(巻二)百三十一～二百二十四　(巻三)二百二十五～三百十六　(巻四上)三百十七～四百二十七　(巻四下)四百二十八～五百九十九　(巻五)六百～七百二、六百三(?)、七百四～七百五十　(巻六上)七百五十一～八百八十　(巻六

下）八百八十一～九百七、九百六（ママ）、九百九～九百九十三
（巻七）九百九十四～千百五十一　（巻八）千百五十二～千二百二十七　（巻九）千二百二十八～千二百八十一　（巻十）千二百八十二～千四百二
頁数　（首巻）四十七　（巻一～巻十）千四百二
匡郭　四周単辺。内側に本文用の枠が大部分の頁にあり。巻一～巻十は、各頁上欄外に匡郭の一部を利用して横長の矩形を作り、「入部五畫」、「土部一―三畫」、「戈部十二―十八畫戸部一二畫」等の如く、部首およびその頁に収載されている標出字の部首内に於ける該当画数を右横書に記す。柱とちがってこの部分も石版である。竪十二・六六、横八・九八糎。本文枠は竪九・八五糎。
備考　巻五の冠解の出し方の乱れは、明治五年版や十年版と同じくあり。巻七の尾題から考えて、おそらく明治十年版に基づいての翻印であろう。
所在　国立国会図書館をはじめ諸所に多し。

明治四十二年版

（P）　千葉久栄堂版

小本石版薄紙刷三冊　紺色布貼帙入り
表紙　金茶色布貼　竪十三・六、横九・八五糎。
題簽　脇題簽は無い。
（帙）単枠付短冊形白紙、左肩に貼付。「増續大廣益會玉編大全　完」
（正）子持ち枠付短冊形白紙、表紙左肩に貼付。角書「四聲附韻／冠註補闕／類書字義」。書名「増續大廣益會玉篇大全」。その下に「上（一畫 二畫 三畫）」（中（四畫 五畫 六畫）下（六畫七畫 八畫九畫 自十畫至十七畫））と巻分けおよび収載部首の画数を記す。六画は二冊にまたがって収録されているが、上・下の区別を示していない。
上巻前見返し　緋色地紙に青色刷。
双線で子持ち枠内を、中央が幅広くなるように竪に三ッ割。真中の欄に「増續大廣益會玉編大全」の書名を出し、右に「毛利貞齋著」と上方に寄せて記し、左に「大阪　千葉久榮堂發行」と記す。
内題　明治十六年版と比べ、次の巻が一部異なる。（巻三）増續大廣益會玉篇大全巻第三　三畫」　（巻四下）増續大廣益會玉篇大全巻第四　四畫」　（巻六上）増續大廣益會玉篇大全

巻第六　六畫」　「第六」の字の右下に「上」とあったのを消した跡がある。（巻六下）増續大廣益會玉篇大全巻六下六畫」　この「下」の字は削ろうとした形跡がある。

尾題　次の巻が明治十六年版と異なる。（巻二）増續大廣益會玉篇大全　三畫」　「三畫」の下方にあった「上」の字を削っているが、かすかに残存している。（巻三）巻之三三畫　終」これも「三畫」の字の下方にあった「下」の字を削っているが、かすかに残存している。（巻四上）四畫上㒸」（一行置いて）増續大廣益會玉篇大全巻第四　四畫」　（巻四下）已上四畫」（一行置いて）増續大廣益會玉篇大全巻第四」　（巻六上）已上六畫上㒸／増續大廣益會玉篇大全巻六」　（巻六下）六畫下至於此㒸」（四行分置いて）増續大廣益會玉篇大全巻之六　終」　巻七の画数は「七畫」となっている。

刊記　終巻本文最終頁（終丁オ）は通行本と同じ。後見返しに子持ち枠付の奥付を付して次の如く記す。

明治四十二年九月十五日訂正石版印刷
明治四十二年九月十九日訂正石版發行

著作者　故人　毛利貞齋
大阪市東區北久寶寺町四丁目八番地
發行者　千葉德松
大阪市東區北久寶寺町一丁目五十九番邸
印刷者　園田藤三郎

不許複製

大阪市東區北久寶寺町心齊橋東江入
發行所　久榮堂書店
東京市京橋區中橋通廣小路
賣捌所　文榮閣書店
東京市神田區多町一丁目
賣捌所　精華堂書店
京都市上京區三條通寺町西江入
賣捌所　山中嵩松堂

目次　首巻の凡例の後、五頁～六頁途中にかけて「増續大廣益會玉篇總目次」として、画数別に部首および頁数を九段に記す。また巻一～巻十にある各巻別の目次は、概ね各巻始めに、子持ち枠付有界十～十二行三段で在り、部首の頁数は通しで「葉」や「員」「頁」等の字を伴なわない漢数字のみで示されている。巻三・巻四・巻六の各上下の目次は、

各々合わせて一緒にし、各々の上巻の始めに記されている。また巻五のものは巻四の目次のウラに、巻十は巻八九の目次のウラに、各々位置する。

柱刻　明治十六年版のものを手直しして使っている。すなわち柱のオ・ウの両方に頁付をし、また巻三・四・六にあった上・下の別を削っている。但し巻二―二〇五・六頁には「巻三上」とはっきり見え、巻四上―三三五・六も「巻四上」と「上」の字がかなりはっきりしており、その他数ケ所に亘って「上」あるいは「下」の字の痕跡をかすかに留めている個所がある。

頁付　首巻は独立四十五頁。他は通し。間違いや明治十六年版の丁付の削りのこしもある。目次共。（巻一）一～百三十八目次には首巻よりの通し頁「四十六」が付いている。また九頁と十頁の頁付が入れ違っている。▽（巻二）百三十一～二百二十六＜但し最終頁は匡郭のみ。なお、本来巻二の冒頭であるべき内題を有する頁が、百三十五・百三十六と頁数をつけられた為、次にまわってしまい、もともとその次であるべき頁が百三十三・百三十四として逆に前に来ている。▽　（巻三）二百二十七～三百十八　（巻四上）三百十九～四百三十二＜最終頁匡郭のみ▽　（巻四下）四百三十三～六百四　（巻五）六百五～七百五十五　（巻六上）七百五十六～八百八十六　（巻六下）八百八十七～九百九十九　（巻七）千～千百五十八　（巻八）目次二頁分と千百五十九～千二百三十四　（巻九）千二百三十五～千二百八十八　（巻十）千二百八十九～千四百十＜最終頁は匡郭のみ▽

頁数　目次共。（首巻）四十五　（巻一～巻十）千四百十三

分巻　（上冊）首巻・巻一～巻三　（中冊）巻四上～巻六上　（下冊）巻六下～巻十

匡郭　明治十六年版に同じ。竪十一・四、横七・三五糎。本文枠は竪七・三五糎。

備考　首巻凡例一頁（一オ）匡郭外右下に「大阪中ノ島　伊藤聽泉堂銅刻」と記す。これは明治十六年版のものである。凡例の後に總目次が入っている代りに、引用書目が無い。またそれに續く「四聲附韻字總目録」は新しく版をおこしている。奥付に「訂正石版」とあれど、右に見た如く大部分は明治十六年版をそのまゝ流用したゞけで、手直しした個所は総目次・目次・四声附韻総目録それに柱刻の一部など、極少ない。巻五の冠解の出し方も明治十六年版に一致

する。

所在　国立国会図書館亀田文庫

明治四十四年版

(Q)　千葉久栄堂版

小本石版薄紙刷三冊　紺布貼帙入り

表紙　緑味を帯びた金茶色布貼。

題簽　明治四十二年版に同じ。

上巻前見返し　桃色地紙に黒刷。様式は明治四十二年版に同じ。

内題・尾題その他　明治四十二年版に同じ。

刊記　明治四十二年版のものを流用。たゞし刊年の一部を「明治四十四年十月一日訂正石版印刷／明治四十四年十月五日訂正石版發行」と直し、その下に小さく矩形枠を組んで「正價金壹圓參拾錢」と値段を記したところが異なる。

備考　明治四十二年版の後刷り本である。但し前版にあった巻一や巻二の頁付の錯誤は訂正されている。